
革命のスキル

ヘルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

革命のスキル

【Nコード】

N3711I

【作者名】

ヘルツ

【あらすじ】

世に隠された遺伝子操作によって生まれた者達ニュー・チルドレン。優秀であり、異端なる能力を持つ。そんな彼らがいる世界で運命の物語が進む。

*しばらく更新休止になります。次回更新は2月になるのでお待たせします。
すいません。

プロローグ

ニユー・チルドレン。

それは科学者たちが異端なる優秀な遺伝子を造り上げて、それを組み合わせて誕生した者達を指し、世界のいたる所にいる。

頭も良く、容姿も良い。そして副産物として能力が備わって、超能力みたいな能力を身につけていて、外国では魔法と呼んでいる。透視だったり火さえも出してしまふ。

そんな子供達が社会に出ればどうなる？もちろん危険視されてしまふだろう。

国家も黙ってはいられない。だが、黙っているんだ。

チルドレンは世に存在する。それは監視されるかのように。現在高校生
の彼らを。

その数は数十万を超える。

「うーん」

広く巨大なモニターがある部屋。

青いスーツを着こなした青年がモニターを見ながら椅子に座ってドーナツを食べている。

年齢は20代前半だろう。モニターには数人の高校生のプロフィールが羅列されている。チルドレンだ。

男はマスターと呼ばれている。チルドレンを管理している者だ。

「さて、彼らはどう動くかな？」

マスターは微笑みながら言う。

後ろから白衣を着た女性が現れた。長い黒髪を束ねていて、年齢はマスターに近いだろう。

彼女はマスターに尋ねる。

「ここまで放っておいて大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫だ。直に展開は大きく変わる。その為に国家を黙らせただ。」

私の思うがままにやらせてもらう。皆逃れようなく動くさ」

マスターは数人のプロフィールを眺める。

「その中でも彼は重要だろう」

一人の男子高校生を指差す。青く見えるミディアムな黒髪の少年がモニターに大きく映し出された。プロフィールが表示される。

真司 京 水無月高校2年生。

所属グループ無し。

「グループに所属していない？」

女性は疑問に思った。

「ああ。一応彼はチルドレンと自覚はしているんだが、現状には気づいていないだろう。」

他のチルドレンとはまともに接触していない」

「そうですか。能力は……これは!？」

女性はプロフィールを確かめた後に一歩下がる。

「驚いたかね？」

「こんな能力・・・チルドレンの中でも逸脱しています！」

能力^{スキル}。それはチルドレンが所有する力。

それは超能力のように扱い。様々な個性的な力がある。

一般的には透視、電撃、肉体強化等がある。現代では異端な光景だろう。

「だろうね。でも、扱いきれてないようだ」

「この少年を私は知りませんでした」

「そりゃ隠していたからね」

「な!？」

女性は驚愕する。この少年が隠されていたことに。何の為に。

「これからの為にそうしてきたんだから。他のチルドレンにも隠しておいたよ。」

やがて全てのグループが動くさ。彼を中心にね。ああ、楽しみだ」

男は椅子から立ち上がる。

「彼はハアンサーだ。何を導くかな？」

男は笑う。世界を自分のモノにしているかのように。

ここから先展開する物語はこのマスターは知っているだろう。

動いている。運命の物語が。

プロローグ（後書き）

初めまして。作者ヘルツです。

始めたばかりですが、読んでくれると嬉しいです。

アドバイスや感想があったらお願いします。

第一章 新生の子供達 1 - 1

第一章 新生の子供達

ニユー・チルドレン

「・・・・・・・・」

水無月みなつき高校。教室。

男の名は真司 京。この物語の主人公である。
彼が進める物語をご覧あれ。

(どうしようもなく暇だな・・・)

俺はただ授業を聞いている。ただそれだけだ。

世の中役に立つかどうか分からない知識を学んでいる。もしかしたら役に立つかもしれないな。

けど、俺は聞いてはいない。ある事が引っかけているからだ。俺自身の謎に。

7

(あれから2年くらいか・・・)

俺を育ててくれたお爺さんが病気で亡くなった2年前。

亡くなる直前にお爺さんは言った。「お前は革命なる子供。ニユー・チルドレン」と。

ニユー・チルドレン？けど、何となく分かっている。自身と他の人と比べれば違和感がある。それは確かだ。

「なあなあ」

隣から声がする。

「この後ゲーセン寄らね？」

茶髪な髪を揺らせながら言ってくる男。

黒宮くろみや 元気げんき中学の時から知り合いだ。

色んな女子の情報を執拗に知る事で有名であって遊び好き。

「今度は何やるんだ？」

小声で伝える。今は授業中。先生には聞こえないようにしなければ。

「格ゲーの新しいのが入ったって聞いたからさ。やるうぜ」

あのゲーセンは帰り道にあるからな。ついででいいか。

「ああ」

俺は了承する。

「じゃあ行くうぜ」

元気は笑いながら言う。ゲーセンには少しだけいれればいいか。

そう軽く思う。そうだ、これが毎日だ。何も起きなければいい。

放課後

「いや〜。やっぱりお前に限るぜ。他の奴は彼女とデートとか何だぜ？」

「別にいいだろ。とにかく早く行って早く終わらせるぞ」

「美里ちゃんの夕食に遅れちゃダメだもんね」

「……まあな」

神田 美里。隣のクラスにいる女子。近所で子供の頃から付き合いがあつて、お爺さんが無くなって以来から夕食に招かれる事がある。

「こつこつというフラグは慎重に守らないといけませんぜ？」

「言ってくれるな」

「否定はしないんだな？おつおつ」

ニヤニヤしながら肩を叩いてくる。うざい。いつもこんな感じなんだよな。

そんな話をしながらゲーセンへと着く。

「じゃあ、俺両替してくるから」

元気は1000円札を持ちながら両替機へと走っていく。

周りは新型の格闘ゲームの機械があるせいか、大勢の人が群がっている。

時間が掛かるな。

「……ん？」

奥から学生の方が必死で走って向かってくる。

「とっとうわー!」

勢い良く学生は歩いていった従業員にぶつかった。

「う・・・! すいません!」

学生は謝って、立ち上がって再び走っていく。学ランを着ていて、校章から見ると同じ水無月高校の人だ。そのままゲーセンへと出て行った。

(何であんなに急いでんだ?)

疑問に思いながら、ふと下を見ると学生証が落ちていた。さっきの男が落としたんだろう。見てみるとやっぱり同じ高校のようだ。

俺は拾う。けど・・・異変にすぐ気づいた。

(・・・血!?)

学生証の裏を見ると血がびっしりと付いていた。まだ固まってもいない、新鮮な血が。俺はすぐにゲーセンから出る。

「おい! どうしたんだ?」

元気が呼びかけてくる。大量の小銭を持っていた。何枚か両替をしたんだろう。どんだけやるつもりだ。

「悪い。今日はいい!」

俺はそれだけ伝えてゲーセンから出る。男は・・・いた！
ここは一本道。何とか見つける事が出来た。俺はすぐに後を追う。

(くー！)

俺は走る。あんなに急いでいて、あの血・・・。何かがあるはずだ。

これは好奇心なのか？いや、違う。俺はただあの男に起きた異変に気づいて呼びかける。

一瞬にして浮かんだ思考を俺は実行する。これが正しいと導きかれるように。

距離は少しずつ縮まる。何とか追いつけるはずだ。すると男は道を曲がった。俺も数十秒後に曲がる。そして。

「・・・・・・・・」

目の前には行き止まり。さっきの学生は・・・倒れていた。
もう一人いた男の目の前で。

(え？)

異変が起きた。信じられない異変が。何だ？何が起きた？

思考を巡らす。さっき走っていた学生は今目の前で倒れている。

目の前には黒いパーカーを着込んでいる同じ年くらいの男が目つきを鋭くしながら倒れた男性を見下している。

殺人？そうとしか考えられない。だが・・・俺はその考えは正しくないと思ってしまった。瞬間的に。

「あ？何でデメエがここにいる？まさか、こいつの仲間か？なら分かるけどよ」

男の視線は俺に移る。不良が弱い者を睨むように。

「……」

俺は黙る。この状況を何とか理解したい。

「その様子じゃあ知らないって事か。何で来れたんだろっな？」

俺は一步下がる。分かる。これは危険だと。

だが、俺はある所を見ていた・・・男の右手。赤く燃えている手を。何だ・・・あれは。

「見ちまったか？ああ、見ちまったか」

男は言いながら俺に近づく。

倒れた男をよく見ると、胸の数箇所が黒く焦げている。そこから煙が発せられていた。

もしかして・・・死んでるのか！？

「……あんたがやったのか？それに何だ、その手は……」

疑問があるなら知る。

俺は質問する。そうしなければいけないかのようじに。今ここで知らんのだ！

「てめえには関係ない。ああ、関係ないんだ！これは正義で行った事。」

だから俺は悪くはないんだよな」

男は赤い右手を見ながら言う。正義？これが？

「・・・その人をどうして」

俺は男を見据える。

「あーあ。正義の為に رفتた事だが見られちゃったな。余計な部分も」

男は赤い右手を壁にくっつける。そこからはジューと音を鳴らしながら煙を出す。

あれは何だ？・・・右手から直接発しているようだ。まるでバトル漫画に出てくるキャラのように。

「まあ、どうせあいつ（・・・）が片付けてくれるから大丈夫だよな」

男は納得したように頷く。

「じゃあお前も死ぬ」

「・・・は!？」

死ぬ？つまり・・・殺される!？

「じゃあな!!」

瞬間、男の右手から大きく炎が発せられる。何だ・・・夢を見ているのか？現実すぎる夢を・・・。

俺は逃げる体制になるうとする。間に合え!これが現時点でもっとも正しい!

「死ね！」

男の右手からここでも伝わる程の高温の灼熱の炎が俺を襲う。

「クッ！」

俺はすぐに地面に転がる。炎が真上を通った。そこから散らばる火が学生服に掛かる。

「は！すげえな！一発を避けるなんて！」

男は近づく。じわりじわりと。

「次は無い！ニュー・チルドレンに関わったお前をな！」

ニュー・チルドレン！？

「あんた・・・何て言った？」

俺は体制を整えながら聞く。今この男から聞いた言葉の意味を知る為に。

2年前にお爺さんから聞いた言葉を。

「あ？もしかして、お前も？なら、いいや！それなら早い！正義の為に死ね！」

男は狂ったかのように言う。錯乱しているのか！？
大きく振りかぶる。狙いを定めてきた！

「クッ！」

考える！俺が生きる為にする行動を。思いついて実行しろ！
生きるんだ。絶対死ぬわけにはいかないんだ！！

「伏せなさい！」

後ろから女性の声がした。俺はとっさに伏せる。言われた通りに。
そう、これがもっとも正しい行動だ。
真上に何かが通った。鉄パイプ？

「があああー！」

その鉄パイプは男の右手に当たった。男は崩れるように痛みを感じている。

俺は振り返る。その声を発した人を見る為に。

「よし。いいわね」

ブレザーを着込んでいて、茶髪で肩くらいまでの長さの女子高生。
気が強そうに見える。

「あ……あなたは？」

俺は問う。ここに現れた理由を知る為に。

「助けに来たわよ」

「助けに……？」

今の出来事を知っているのか？

「あなたと同じ。さっきのあの学生の行動を見ていて疑問に思ったのよ。けど、私達に関係あるけどね」

関係？まさか……。

「もしかして……ニュー・チルドレン？」

「あら？あなたもそうなの？」

始まる……。何も変わらなかった日常が異変に染まって。俺はこの日最初から分かっていたのか？そしてこれが運命である事を。

「てめえら!」

打ちひしがれていた男は立ち上がって俺達を睨んでくる。

「2人ともそうか!? ならいい!」

男の右手が火柱と化する。そこまで出せるのか!?

「とりあえず逃げるわよ」

女子は俺の前にきてスカートから何かを取り出す。携帯電話!?
アンテナが伸びて、そこから煙が出ている。

「それって!」

俺は女子の肩を掴む。

「大丈夫」

女子はニヤツと笑ってその携帯からプシューと音を鳴らして大量の煙が発射された。

「ダッシュよ!」

そして俺の手を掴んで走り出した。俺も瞬時に走り出す。
白い煙幕が男を包み込む。

「な!？」

男は驚き、煙幕に包み込まれる。

俺は急いでその場から離れる。今なら大丈夫!そう思いながら一生懸命に走った。

「とりあえず付いてきて!」

曲がり道を何回か通って付いていく。後ろを振り返るとさっきの男はいない。追ってきていないようだ。

「あの公園の奥へ」

女子は向こうにある公園を指差す。俺はこくりと頷いた。とりあえずあの場所に隠れれば。

俺達は公園に着いてすぐに奥の茂みの裏側へ移動する。公園のトイレが壁になるように隠れた。

「あいつ……。殺したのか？」

「ええ、おそらくそうね」

女子は壁から向こうを覗き見ていた。すぐに振り返って俺の前に来る。

「あたしは福山 零^{れい}。あなたは？」

「……」

俺は女子を改めて見る。一応味方の感じがする。

「真司 京だ。とりあえずあんたに聞く事がある」

「いきなり言うわね」

「いいから答える！ニュー・チルドレンって何だ!？」

その事に必ず関係がある。聞き出すんだ！

「あなた・・・知らないの？」

福山は疑問に思っている。

「・・・2年前に無くなったお爺さんから聞いたんだ。俺はどつや
らそうらしい」

「なるほどね・・・そういう子がいてもおかしくないわ」

福山は納得するように頷いた。

「じゃあ能力スキルは？」

「能力スキル？」

「え?・・・まさかそれも知らないの？」

「ああ。まったく知らない。もしかしてさっきの奴みたいに火を出
すあれか？」

体から火が出ている。そんな現象初めて見た。

まるで漫画やライトノベルみたいだ。

「まあ、そうね。超能力・・・あるいは魔法みたいな感じよ。
あたし達子供達には能力があるの。さっきの男なら外能力の火を扱
う能力よ。」

他には内能力ないのつちよつくでテレパシーとかあるわね。能力値もあって、強さ順
にA、B、C、Dってされている」

なるほど。信じたくないが・・・そうみたいだ。

「あなたにもあるはずなんだけど」

「能力が？」

「ええ。そういうの今まで無かった？自然に発現すると思うけど」

「・・・」

俺は考える。能力？うん。数秒考えて・・・。

「無い」

「・・・もしかして無能力？ノー・スキル・・・まあ、そんな子がいるって
記録はあるけれど」

「何も能力が無いって事か？」

「例外にもそういう事もあるわね。基本的に子供達は頭や容姿とか
良く出来ている。」

能力は副産物よ。けれど・・・無能力ノー・スキルなんて珍しいわ」

「あんたは？」

彼女もニュー・チルドレンなら能力を持っているはず。

「あたしの能力は完全記憶^{オールメモリー}。見たもの聞いたもの感じたもの全て頭の中で保存されるの」

「便利な能力だな」

「それなりに恵まれているけど、攻撃向けじゃないわね。ちなみに情報量は良いわ。」

さっきの男も、能力記録^{ニュー・チルドレン・データ}でいたわ。宮下 直人 火の能力 ランクC」

あれでランクC！？まだ上がいるわけか……。

「……全部で何人いるんだ？俺たちは」

「数十万人よ」

「そんなにいるのか！？」

ある程度予想したけど、そこまできるとは……。

「100万人いないだけマシよ。世界各地にいるわ」

「そうだけど。けど、そんなにいるなら知られているんじゃないのか？」

「知られないわ。あたし達は最高機密にされている。それにあの男が仕切っているんだから・・・」

「そいつは？」

「・・・マスターよ」

「マスター？」

「子供達を管理している人。世界の裏からね。笑いながら・・・。」

「管理つて・・・」

言いかげよとした時。感覚に違和感を感じた。

何だ！？騒がしかった公園で遊んでいる子供達の声が無い。

「まさか・・・」

福山は飛び出す。俺も続いて飛び出した。

「な・・・!?!」

誰もいない！？人が俺達以外いなくなった。

ただ静かな公園だ。

「これは・・・空間遮断！」

「そついつ事」

後ろから声がした。俺と福山は振り返る。

さっきの男、宮下ともう一人の男が30メートル近くにいる。今の声はこの男が言っていた。インテリな黒縁眼鏡をかけている。

「やっと見つけた……。てめえは下がってる。こいつらを殺す」

「せっかちですね。準備もなしに発動したから、限界は10分ですよ」

「ああ、分かってる！」

側近にいた男は後ろに下がって、さっきの男は右手が赤くなって火を出す。

「これって……」

俺は福山に言う。

「あの隣の男は空間遮断の能力スキルを持っている。この公園を対象として空間を遮断。

今この公園はさっきの公園とは違うのよ。いるのはあだし達だけ」

早口で説明をしてくれた。なるほど。そういう能力もあるってわけか。

「とりあえず、あなたは下がって」

福山は俺の前に移動する。

「は！女がくるのか！」

「いくわよ」

福山はスカートのポケットから・・・銃を取り出した!?

「それ!?!・・・モデルガン!?!」

「何言ってるのよ?本物よ」

福山は銃を発砲する。本物!?

宮下は右手を振り下ろして炎が舞う。撃った弾を弾く。

「なんで本物を!?!」

「ニュー・チルドレンの世界では銃社会も何も関係ないのよ。どうせ処理してくれるんだから!」

そう言いながら2発目を撃つ。

「そんなの効くか!」

男は左へジャンプして弾を避ける。そして右手を上げた。

「いけ!」

右手から炎が発して5メートルを越す火柱が出る。

そこから火の玉が・・・10発くらい放たれた。

「どうだ!?!」

男は笑いながら言う。この距離なら福山に当たってしまう!

「う！」

福山は後ろへ下がろうとするが避ける事が出来なさそうだ。俺も当たるかもしれない！何とかしろ！あの攻撃を！

「・・・福山！」

何故だが一瞬ひらめいた様に思った。この状況をどうにかする方法を。

俺は福山の後ろの引っ張り一緒に地面に倒れる。

「え！？」

引っ張られた福山は驚いたまま俺と一緒に地面に倒れる。火の玉は全部公園のトイレに当たって壁が崩れた。

「チツ！」

宮下は舌打ちをする。

「あらら〜」

後ろに下がっている男は楽しそうに見ている。

「・・・どうして？」

起き上がる福山は疑問に聞いてきた。

「・・・今の攻撃は全部あんたの上半身の真横に狙っていた。だか

ら地面に横になれば当たらない」

俺はゆっくり説明する。

「どうしてそんな事分かったの？」

「……分からない。けど、一瞬」

あの攻撃を理解した？そして行動もあれが正しいと思った。

「次はそうはいかねえ！」

男はもう一度手を振り上げる。手の上には大きく膨れ上がる巨大な火の玉が現れた。

「くるのか！」

あの攻撃がくる！最悪だ。

「……きたわ」

福山は微笑みながら言った。きた？

瞬間。ズドンと爆音が聞こえる。

「あ!？」

宮下は驚き、巨大な火の玉は消えた。何だ？

「空間が……避けた？」

眼鏡の男が不思議に言う。

「いや・・・斬られた」

更に続けてそう言った。斬られた？

「遅かったわね」

福山は片目を瞑りながら言った。

「部活中だったんですよ。発信がきて急了ました」

福山の後ろから誰かが現れる。

短髪の黒髪。そして・・・袴はかまを着ていて、右手には木刀を持っている。

「ん？お前は？」

俺に言ってきた。

「彼もニュー・チルドレン。助けたの」

「ああ、そうなんだ。俺は羽間はなま 楓かえで。よろしく。自己紹介は後でいいよ」

言い終えた後に木刀を構える。

「さて、やりますよ」

羽間は真剣な顔で宮下に向かって言う。早くこの出来事を終わらせ

たいようし。

「ああ、直さなきゃ。頼みますよ」

眼鏡の男は爆音がした方向へ歩いて行った。
羽間が切り裂いた空間を直すようだ。

「たく・・・また邪魔がきたか」

宮下は齒切れを悪くしている。俺たちを睨みながら。
斬られた空間が直るまでは何もしてこなさそうだ。どうやら今戦えば、空間外の人達にその騒ぎが気づかれる可能性がある。それを避けるようにしているだろう。

「どっしてここに？」

俺は福山に尋ねた。

「これよ」

福山はさっき煙を噴射させた携帯を取り出す。

「これ、煙が噴射されると同時に緊急発信が作動するの。それで、もっとも近くにいた彼、楓を呼び出したの。GPSで場所も伝えたしね」

「楓は一年生で剣道部部长よ。あたしとあなたと同じ高校よ」

確か……聞いたことがある。凄腕の新生が部長を打ち負かしたって……ていうか。

「あんたも同じ高校だったのか？」

「そうよ。ちなみに2年3組。知らなかった？」

「ああ」

「同じ年だったのか。」

「そっか……」

福山は顔を横に向けながら言った。
羽間の方では。

「お前、ラストだな」

「そうだ。だからさっきの奴は殺した。全ては皆の為にやってる事だ」

「ラスト？」

「ニュー・チルドレン絶滅を実行するグループ。そんな奴らよ」

「……何の為にだ？」

「あたし達は社会に影響を及ぼすのよ。そんな世界になったらどうなると思う？」

・・・悪の考えを持つてるなら危ないわけか。何十万人もそんな考えを持つなら・・・。

「それならいつそ全員殺せばいいってわけ。・・・ある意味正義と言えるわ」

だからあの時あいつは正義と言い張ったのか。

「世の中何が正しいのか分からないわね」

「・・・」

「てめえも死ね！」

宮下は鋭く羽間を睨みつける。

「ここで逃げた方が身の為だ」

羽間は宮下に向かって言う。

「てめえがな！」

宮下は強く拳を握り締める。

「直りましたよ」

男が歩きながら戻ってくる。

「いやー。派手に斬られていました」

「なら下がってる。こいつら全員やる！」

「頑張ってください」

男はベンチに座った。顔をニタニタしながらこっちを見ている。

「あいつは？」

「・・・分からないわ。記録にも載っていないし。ニュー・チルドレン全部を把握しているわけじゃないから」

そんなに数がいるならそうだろうな。俺の事も知られていないようだし。

「・・・死ね！」

宮下は羽間に向かって右手を振って炎の玉を4つ放つ。速度もさつきより早い。

「遅い！」

羽間は構えた木刀を縦に一振りする。瞬間、羽間の前方から衝撃波が出る。

その衝撃派は炎の玉を全て消した。

「あれも・・・能力か」

「ハ波動」 外能力 ランクB。衝撃するエネルギーを出す能力よ。攻撃系としては優れているわね」

「木刀から出してたよな？」

俺が見た限り、羽間自身ではなく木刀から直接出している。

「あれはエンチャント（付加）といって、楓なら木刀に能力を付加させて、木刀から波動を出せるようにしているの」

そういうのもあるのか。色々あるみたいだ。

「チツ！」

宮下は舌打ちをする。

「……零さん。もしかしてこの後集まりですか？」

羽間は福山を見ながら聞く。

「そうよ。帰りは遅くなるわね」

「そんな……」

楓は木刀を構えて宮下を睨みつけた。

「お前のせい……」

怒りをあらわにしながらつぶやく。どうしたんだ？

「これじゃあ……アニメ見れないだろ……!」

……は？

「予約録画もしていないし……今日から始まる新アニメが!!」

「……えーと」

「じめん。ああいう奴なの」

「……オタク?だから、さっき早く終わらせたそうにしていたのか・
……」

「ごたごた言ってるじゃねえ!」

宮下は矢の形状をした炎を放つ。

「おお!」

放たれた炎の矢は羽間の木刀に当たって、木刀の半分が消し飛ばされた。

そのまま羽間の持っていた半分の木刀は地面に落ちた。

「ハ!次で終わりにしてやる」

宮下は羽間に向かって走る。

「まるでやられ役のキャラみたいね。本当にやられるわよ」

福山は宮下を見ながら言う。宮下は走って羽間の前に来る。赤い右手からは炎を纏って、そのまま羽間を殴ろうとする。

「終わりだ!!」

「…………お前だ」

羽間は右手の平を宮下の顎に向ける。そして、その手の平から衝撃波が出る。

「あがぁ!?!」

宮下は打ち上げられるように体ごと上空へと上がった。羽間は地面に落ちた半分の木刀を持つ。

「俺の楽しみを奪った。この怒り……ぶつけせてもらう!」

打ち上げられた宮下に向かって木刀を横に構えた。

「一切いちげり。空波衝斬くうはしゆうざん!」

宮下の前を木刀を横に振る。そこから大きな衝撃を生み出して宮下を吹き飛ばす。

何て力だ…………強い。

「が……………ああ」

地面に倒れる宮下。

「まだだ……………まだだ……………まだだ!……………!……………!……………!……………!」

宮下は叫ぶ。

「あいつ……………」

「……今まで自分と同じ人を殺しているのよ。精神が保てられないのも無理がないわ」

どうすればいいの？ ……分からない。どうしてこんな事が。

羽間は宮下の前に来る。

「同行してもらおう」

「ふ……ふざけるな!!」

「なら、気絶させる!!」

羽間は木刀を振り上げて降ろそうとする。だが。

「ん!？」

羽間は木刀を途中までしか降ろしていない。

「何だ……こいつに振り下ろせない」

そのまま羽間は固まっていた。

「悪いね」

ベンチに座っていた男が宮下の横に来た。

「君と宮下さんの間の空間をいじくってるんですよ。ついでに今は俺も。宮下さん、行きましょ」

「てめえ……ふざけるなよ」

「今くしていうだけで、更に時間が無いんですよ」

男は宮下の肩を担いだ。

「そんじゃ、また会いましょう」

笑いながら踵を返した。

「待ちなさい！」

福山が追いかけてようとすが、フツと公園の空間が変わる。

さつき遊んでいる子供達や散歩している大人がいた。

同時に二人もいつの間にか消えていた。

「ふう。あいつ……やるな」

羽間は呼吸をしながらゆっくりと木刀を振り下ろしていた。

「逃げられたわ……」

福山は悔しそうに言う。

「……」

俺はただ元に戻った公園を見渡す。今あった出来事をまったく知らない人達を見ながら……。

あれが……^{リアル}現実だったのか。

第一章 終了

第二章 閃光する学校

2 - 1

第二章 閃光する学校

スパーク・スクール

広い一室。モニター前に座っている男。マスターは連絡をしていた。

「先程死んだニュー・チルドレンはいつも通りに処理してくれ。学校では転校扱い。その後に戸籍を無くせばいいさ。その後に起きた公園での出来事も頼むぞ」

今までもそうしてきただろう。何かが起これば処理して整理すればいい。

必要事項だけ伝えた後に電話を終えた。

「どうですか？」

「順調だよ。ここまでいってくれるとスッキリする」

マスターは微笑みながら女性に言う。

「満足そうですね。次もそうなってくれと嬉しいですね」

「なってくれるさ。皆さん私の思うがままですよ？」

「・・・そうですね」

「起こる事はちゃんと起きて、いずれ死ぬ者は死ぬ。そういうシナリオだ」

モニターには真司 京。福山 零。羽間 楓。宮下 直人 等。先程起きた出来事に関わる人物が表示されている。

「彼らはやってくれる。楽しみにしているぞ」

「彼、真司 京に対してはどうなんですか？」

「いずれ分かるだろう。現実リアルの認識がね」

女性に向かってウインクしながら言った。様さまになってるんだけど、少しうざい気分になる。女性はそんな気分になって彼を見ていた。

現在朝、登校中。昨日のあの後に。

「エックス
X？」

「あたし達が所属するグループよ。平和活動を行う組織と思って」

「入って欲しいですよ」

羽間も言ってくる。

「悪い。入らない」

「……どうして？」

「グループに入ったら嫌でもさつきみたいに巻き込まれる可能性がある。だから、俺は入らない」

俺ははつきりと言った。

「……………」

福山は黙った。

「真司先輩がそう言うなら仕方ないです」

そこで俺は二人と別れた。短い時間だったのに、やけに長く感じた。そのまま美里の家に行って夕食を食べた。

「どうしたの？何か疲れたって感じがしてるけど」

「……………ん？ああ、何でもない」

「教室に迎えに行ったら、ゲームセンターに行ってるって聞いたよ。遊んだの？」

「すぐに出たよ」

気づかれないようにしないといけない。巻き込ませたくない。でも…………一人同じ高校の学生が死んだんだ。どうなるんだ？

「……………」

「元気？」

後ろから声がする。振り返れば福山がいた。

「そう見えるのか？」

「ええ。見えるわ」

そんなに表していたのか。気をつけなといけないな。

「本当に入る気無いの？あたし達はラスト・・・それ以外のグループからあんたを守るわよ」

「それ以外のグループ？ラスト以外にもいるのか？」

「いるわ・・・。あなたが考えている以上かもしれないわ。日本だけじゃない。外国にも」

複数のグループが存在する。そのグループが戦っていくのか・・・。

「やっぱり入る気は無い」

「そっか」

福山は残念そうに言った。そう話している内に学校に着く。周りは登校する学生。

校門では笑顔で挨拶する教師達・・・え？

嘘だろ・・・昨日この学生が死んだんだぞ？

なのに何事も無かったかのようにある高校。まいにち

「これが日常リアルなの。ニュー・チルドレンに関わる出来事は表には出ない。

全てマスターが整えているの」

「昨日の事も処理されたって事が」

「そういう事。行くわよ」

「……………」

俺は歩きながら、ただ呆然としていた。学校を見ながら。

途中まで福山と廊下で別れて教室に入ると、黒宮 元気が駆け寄ってくる。

「何でいきなり帰ったんだ！？あの後ゲームして好調に勝っていったんだぞ！！」

ハイスコア出したんだぞ！見ていけばよかったのに！！それにお前とも戦いたかったんだ！」

……………。

「そりゃ格ゲーなら黒宮 元氣って言われてるもんない」

「元氣に勝とうとするなんて金の無駄だ。やるとしたら家庭用ゲームじゃねえーと挑めねえよ。
やめとけて真司」

「やんなくて正解だ」

他のクラスメイト数名が笑いながら話す。

「……………」

「ん？どうしたんだ、京」

黒宮が聞いてくる。

「あ、いや。……あんだとは戦いたくないってな」

「ハツハハ。いつかやろうな」

こんな光景があった事、俺は忘れてたな。こういうクラスにいたんだ。

そつだ。これが日常だって事を。

「あなた達」

ふいに呼びかけれる。振り向くと。

「ん？何？かおつち」

黒宮が軽々しく言う。

「今月は9月！夏休みが明けたばかりで、まだ気が抜けてないの？」

こう完璧主義者といった感じの人は浦坂うらさか 香織かおり。

長い黒髪のポニーテール。眼鏡をかけている。ブレザーからは大きく胸が盛り上がっている。

このクラスの委員長だ。

クラスの皆からは「かおつち」と呼ばれている。俺は委員長と呼んでるけど。

このクラスは先生を困らせる事が多い。それで委員長がまとめようとする。

「かおつち。違いますよ」

黒宮は委員長の前に立つ。

「何よ?」

「夏休み明けだからじゃなくて、毎日気が抜けてるんですよ!」

両手を腰にあてながら言う。

「はぁ・・・そうだったわね」

「分かればよろしい!ハツハハ!」

ちなみにこのやり取りはクラスの名物となっている。

クラスの皆は見ている楽しんでた。

「それに、もうすぐ文化祭なのよ。ちゃんと真面目にやりなさいよ」

「イベント間近の女子が言う、男子!真面目にやってよ!っつてやつか?ハツハハハハ!」

黒宮は大爆笑する。いつもああいう風に言ってるんだよな。

委員長はピキツとしている。

「ふ・ざ・け……ないで!!」

「わーい!怒る怒る!」

そして追いかけてこが始まった。いつも黒宮は逃げ切れてるけど。俺はそのまま席に座る。その時に先生が教室に入ってきた。

「はいはい。喧嘩はやめなさい」

パンパンと両手を叩きながら言う長い黒髪の女性教師。泉 良恵^{よしえ}。外見は20代は現役といえるくらい。年齢は本人いわく秘密。大人の女性という感じがする。

「だつて。先生。かおつちが」

甘えたような声で言う黒宮。きもいな。

周りの女子も若干引いている。

「私は注意しただけです!」

「はいはい。終わりにしましょ。いいわね?」

先生はウィンクして言う。

「はいーはい」

「……わかりました」

二人は言う事をきく。それほどまでの強制力があるんだ。

先生のあれでクラスの人達は言う事を聞く。これからも。

「では、HRを始めるわよ。号令」

学校が始まる。昨日もこんな風にやっていたんだ。

第二章 閃光する学校 2 - 1 (後書き)

ちなみに、この小説は二人で考えて作成しています。

もう一人はキャラ担当のハグレルマさんです。どうぞよろしくお願
いします

「真司君。放課後生徒会があるわよ」

先生からそう言われて生徒会室に来たけど・・・。

「我々はここにいる!!」

叫ぶ生徒会会長。

「我々は何の為にいるんだね!そう!この世界の為にだ!!人類皆平和!それが一番だ!それをするのが我々だ!」

暑苦しく叫ぶ3年生徒会会長 板垣 将^{ジュウ}。暑苦しい男として有名な人だ。

いつもああいう風にやって生徒会の活動方針を決めている。

「ふふ」

微笑みながら会長を見つめている背中に届く長い黒髪の女性は3年の副会長 如月 麗菜。

2年連続ミスコン優勝をしている。彼女に魅了される生徒は多い。それと、俺も副会長。やる仕事は・・・あんまり無かったりする。

「なあなあ、真司氏。一昨日発売した魔法少女のゲーム知ってるか?」

隣でくねくねしながら話してくる2年 生徒会 会計 三嶋 博幸^{ヒロユキ}。整えたセミロングの髪を揺らしながらアニメ・ゲームの話をする才

タク。

初めて会った時に知ってたアニメの話をつまましたら、かなり話してくる事になった。

人を呼ぶときに氏を付けている。

「面白いのか？」

「そりゃ魔法少女が出ていて可愛い女の子なのに、友達になりたい女の子に対して非道な魔法をぶつけちゃう熱血バトルに変わる恐ろしい作品だ！」

何だそれ……。少し気になるな。

「魔法が沢山出るって所に魅力を感じるってわけなんで」

魔法か……。何か身近に感じてきたよ。いけないな、切り替える。

「聞いているのか！我々が今何をすべきか分かっているのかね？」

暑苦しく顔を接近してくる会長。ちなみに生徒会役員はこの4人だけ。

如月先輩がいるせいか、かなりの生徒会加入の希望者が出たが、会長が厳選した。何の基準で選んだのか不明。

普段やってる事は地味な雑用ばかり。漫画や小説でやってるような権力を振りかざすような事はしていない。むしろ出来ない。

会長は毎日あいう風に暑苦しく言っているだけの生徒会だ。

「いや……。素晴らしい考えですよ。その考えを実行しようとする事はとても良い事です」

「ここは会長に賛同しておいっつ。」

「そうだろ！な！彩菜！」

隣にいる如月先輩に言う。

「立派じゃない。私は大賛成よ」

微笑みながらちゃんと会長に賛同する如月先輩。あの人もいつだつてそうしている。

会長とは生まれたから一緒だそうだ。

校内では、あの二人は実は付き合っているのではないのか？と噂されているが、まだ明かされていない。

「そこで！この素晴らしい計画を実行する為に、今ここで新しい書記を発表する！！」

「お〜！同志が増えるわけですね！」

立ち上がる三嶋。同志って何だよ・・・。

「書記！それを俺は今まで、あえて入れなかった！ある生徒を迎える為に空けておいたのだ！！そして前日にやっと加入してもらったのだ！！」

大げさに謎の演説ポーズをして語る。

「では！入りたまえ！書記の者よ！」

ドアが開かれる。そこに入ってきたのは……。

「どうも」

「あんたは！」

出てきたのは袴を着ていて、木刀を後ろに担いでいる学生。
昨日の……羽間 楓だ。

「あ！真司先輩」

俺の前に駆け寄ってきた。

「ん？お前達知り合いだったのか」

「昨日知りあったばかりですけど。たまたま」

俺は会長にそう言った。あまり昨日の事は思い出したくないし。
会長達に言えるはずもない。適当に言っておく。

「君が新たな同志だな」

三嶋が羽間の前に立つ。

「一年の羽間 楓です」

「知っている。剣道部の部長として有名と聞いているからな。今後
共よろしく頼むー！」

「はい」

二人は握手をする。何か……見てられないのは気のせいかな？

「ハハハ！これで生徒会は完璧となった！！これである計画を実行出来るぞ！！」

共にやってやるうではないか！！」

「期待しているわよ。その成功を」

如月先輩が拍手をする。

「その為に今日を待っていたからな。なあ！羽間！」

「え？ああ、そうつすね！」

軽く聞き流していた。

「羽間氏。ワンセグで昨日の期待の新アニメ録ったから一緒に見ないか？すっげえ可愛い女が出ているぞ」

「マジですか！？見逃してたんですよ！！」

あの二人は意気投合して 携帯でアニメを見ている。

何で生徒会入ったんだろう……俺。寝ていた時に決められていたから入ったけど……こうだとは。

(そういえば、昨日のお礼をしていないな)

副会長の仕事へあまりしてないを終わって学校の玄関付近にいる。大体の生徒は下校している。

羽間には昨日公園で助けてもらったんだ。お礼をしていない。

(確か部活しているよな)

さっき生徒会室に来ていた時は部活の途中だったそうさ。だから袴を着ていたと納得する。

ほとんどの生徒は下校しているけど、一応行ってみるか。玄関から剣道部が活動している格技棟へ向かう。

その数十分前。もう生徒がほとんど下校した時間。生徒会室では。

「ねえ、今度はどこでデートするの?」

「うーん。海なんてどうだ?」

イチャイチャするこのお二人、会長と副会長。

二人だけしかいないこの生徒会室でラブラブワールドを展開している。

そんなやりとりを聞いている少年が一人。

(やばい……)

羽間 楓だ。ドアの前で会長と副会長のやり取り聞いている
部活を切り上げて一人で自主練をしていて、休憩がたら自動販売機
に向かおうとした時に生徒会室がまだ電気がついていたので近寄っ
たらこうなってしまったのだ。

(あの噂は本当だったのか……)

二人が付き合っているという今確認された。

「海ね。いいわ、そこで遊びましょう」

「ああ、いいとも」

ドアの向こうでは二人がデートするであろう予定を立てている。

(いかん！立ち聞きはさすがに悪い。ジュースを買わなきゃ)

ドアから離れようとした時。

「今度は大丈夫かしら？」

「分からないぞ。チルドレン達が襲ってくる可能性は否定できない」

(チルドレン！？まさかニュー・チルドレンの事を言っているのか
!?)

いきなり出てきた言葉に羽間は困惑する。

「どんな能力がくるか分からない。だが・・・その時は相手をする。必ず生きてな」

「そうね・・・。けど、あのドアの向こうにいる子は大丈夫よ。ね?」

(気づかれた!?)

会長達がニュー・チルドレンの事を話していたのを知って驚いたせいで、気配を消す事を忘れてしまった。

(.....)

仕方ない。今逃げる事は最も駄目だろうと諦めてドアを開く。

「お！羽間か」

見た光景は、如月 彩葉が会長の後ろから腕を回して抱き着いている。

羨ま・・・いや、驚く光景だ。そんな事を羽間は思った。

「.....立ち聞きしてすいませんでした」

「あら、最初から気づいてたわよ。私達は構わず話しただけ」

如月は会長に回していた腕をほどいて羽間の前に立つ。

「楓君もチルドレンだって事は知っているわ。私達もチルドレンよ」

「やっぱり・・・そうだったんですか」

先程の会話から考えるとそうなるだろう。二人はニュー・チルドレン。

さっきの付き合っている噂などどうでもよくなっている。

「それにXもね」
エックス

所属している組織まで知っているという事に羽間は更に驚く。
どこまで知っているというのだ、二人は。

「だが、我々とは考えが合わない奴らだがな」

会長 板垣 将はばつが悪そうに言う。

「考えが合わない？」

「色々とな。決してあの組織に入ることはない」

「そうね」

板垣は羽間の肩に手を置く。

「我々二人はグループだ。襲い掛かるニュー・チルドレンを倒す。君も入らないか？我々は歓迎するぞ！」

「楓君がいれば助かるわ。・・・出来れば入ってほしい。お願いするわ」

少し俯くように羽間に言う如月。いきなりそう言われた羽間は少し

考える。

「時間を下さい。今言われてもどうにも出来ません」

「ふふ、そうね」

「我々はいつでも待っているぞ。ゆっくり考えてくれ」

「それじゃあ私達はイチャついている。部活頑張ってるね」

「え……あ、はい！」

羽間は急いで生徒会室から出る。少し心臓の鼓動が早いようだ。

（ええい！）

羽間は気を取り直してジュースを買うのをやめて格技棟へ戻る。

「楓君、協力してくれるかしら」

再びイチャイチャするお二人。

「彼を信じよう。だが、問題なのは」

板垣は目を閉じる。そしてゆっくりと言いはじめる。

「殺せるかだ」

羽間 楓は格技棟で正座をしている。
考える事は先程二人から受けた勧誘。

(どうする……。俺はあの二人に協力するのか)

己の中で静かに考える。まるで見えない敵を切り払うかのように。

そんな時、異変に気づいた。

「これは!?!」

楓は驚いて立ち上がる。……昨日の公園の時と同じだ。
空間が遮断された。この感じを受けるとどうやら学校全体が外と遮断されていると考える。

「とりあえず!」

羽間は格技棟から出ようとドアを開けようとしますが、誰かが出てきた。

気づいた羽間は瞬時に木刀を構える。

「おわ!?!」

出てきた学生は両手を羽間に向かって驚く。

「……………野山？」

「そつだよ、楓」

現れた学生服を着ていて、少し赤がかかっているセミロングの丸くまとまった髪をした男の学生。

野山 光（ひかり）。羽間の友人だ。水無月高校に入学した時に話して気が合つて、よく喋るようになり、遊ぶ事もある。

「いきなり木刀を構えないでよ。恐いって」

「悪い」

構えた木刀を下げる。

「そつだ。忘れ物したから学校に入ったらさ、何か急に皆がいなくて」

皆がいないと疑問に思う羽間。なら、これは羽間達の空間が遮断されてる事になる。

今職員室に行けば誰もいないだろう。

だが、空間遮断が解けば、職員室では先生が何十にも現れている。羽間を狙ったのか？なら、野山は？と思う。考えていき、どうやら空間能力が発動した時に偶然にも乃山も巻き込まれたのかと思う。

「他にも会長や副会長を見かけたよ」

「会長達がいた？」

更に羽間は考えていく。
それなら、この空間遮断はニュー・チルドレンが対象とされている。
普通じゃそんな事が出来るはずがない。相当な空間使いが発動して
いるようだ。

「とりあえず行こう」

野山 光は急ぐように羽間に言う。

「ん？おお」

格技棟から二人は出る。長い廊下に渡る。

一方、真司 京も異変に気づく

(これって……昨日の公園と同じ!?)

どういう事なんだ!? 学校で?

(とりあえず……今は)

辺りを周りを見渡す。ここからは……生徒会室が近い。
そういえば会長達は残っているはずだ。彼らは大丈夫だろうか?
行って見る必要は……あるな。羽間に会うのは後にしよう。
スラスラと思考していく。正しい判断を行っているような感じだ。
俺は走って生徒会室へと向かった。

格技棟は3階で本校と渡り廊下で行き来する。
格技棟から出た羽間と野山は3階の教室廊下を歩いていた。

「何で人がいないんだろうね」

先頭にいる野山は不思議そうに周りの教室見渡す。

羽間は立ち止まる。

「どうしたの？」

「どうして人がいなくなっただろうか・・・か」

疑問に思う。人がいなくなった事ではない。それは。

「なあ、野山・・・何がしたい？」

「ん？どういふこと？」

振り返る野山。驚くように言ってきた。

「この空間遮断では、必然的にニュー・チルドレンだけが掛かるようにされているはず。」

野山がいる事自体が不自然。けど、野山は何も知らないニュー・チルドレンなら何とか分かるが・・・」

「いきなりそう言ってもね」

野山は頬を掻きながら言う。けど、その目は何か期待しているように。

学校から数十メートル離れたマンションの屋上では、一人のインテリな眼鏡を掛けている学生がいた。携帯電話で誰かと連絡しているようだ。

今日は赤いジャケットにジーンズ。灰色の帽子をかぶっていて、本人なりのオシャレをしているんだらう。周りから見ても似合うかどうかは別として。

「よし。入念な準備をして上手く展開出来た！。我ながら良い出来で」

男はニヤニヤしながら形成した空間に包まれている学校を見る。

「ちなみに、ちゃんとチルドレン達を対象してますぜ。一人残らずね」

自信満々にそう伝える。ある男に。

『ご苦労。後は彼らが活躍してくれるさ。君はそこで待っていたまえ』

「了解 けど、あの男もニュー・チルドレンでしたんか？データベース記録上でいなかった気が」

『記録上には存在しないニュー・チルドレン。どうだい？謎だらう』
電話の向こうからは愉快そうに言うてくる。

「では、引き続き維持していてくれ」

「了解、マスターさん」

連絡を終える。話していたのはマスターだった。

「まあ、あの男はいつか。それにしても、本当に可哀想だな、あの木刀男」

もう一度学校を見つめる。その顔はまるで同情するかのよう悲しく、切なく。

「俺にはどうでもいいか 頼みますよ、皆さん」

再びニヤニヤとする。さっきの表情は嘘だったように。

その頃、羽間と野山は。

「俺には疑問がある」

羽間は半年前から野山にはいくつか疑問があった。

ある時、野山と帰る時に能力による攻撃を受けたり――その時はす

ぐに野山と別れた)
そして。

「何回かのニュー・チルドレンと交戦していた時には、近くで野山を見かけたと報告であった。」

そして今日も……。偶然ではないはず」

時折、野山からは何かを感じる。それは気のせいにしたが、何度も同じような事があった。

段々とする疑問。それはやがて分かっていく。

「今までも気になっていたが……。ようやく確信になる。お前はニュー・チルドレンだ。そして……。敵だ」

言った。羽間は言いたくないをついに野山の前で言った。それは友情を壊すこととなる。

だが、それでも違うとなってくれる事を羽間は心の中で願っている。

「……。そっか、ばれちゃった。やっとね」

羽間の願いは叶わなかった。笑いながら告げる野山 ひかり 光。
二人の少年の友情は壊れるのだろうか。

ついに野山から聞いた、その言葉。

「けど、やっと気づいてくれたね。嬉しいよ。じゃあ、ちょっと待っててね」

野山は右手を振るう。瞬間、そこから青白い電撃が放たれた。その速さは凄く、すぐに羽間に襲い掛かる。その電撃を木刀すなわち波動で弾く。電撃は飛び消えた。羽間はすぐに野山を見るが、野山がいない。

「・・・・・・・・野山」

消えた野山。どうやら電気使いの能力。確信を得た。彼はニュー・チルドレンだ。

待っててねと言われた。その意味とは。

「ク・・・・」

違ってほしかった。まさか敵だとは思いたくもなかった。

羽間は強く木刀を握る。

30秒経つ。刹那、雷光が羽間の横を通った。その電流の一部が飛び散る。

羽間の前には野山がいる。長い刀を納めた鞘を持って。

「じゅめんね。これを取りに行っていたから」

電気力で自身を高速移動させて刀を取りに行った。並大抵の能力

者ではない。

鞘を羽間に見せつけるようにする。それはつまり戦いを行う事を意味する。

「どうしたの？」

「答えてくれ・・・どうしてなんだ!？」

羽間は叫ぶ。まだ信じたくはなかった。彼が友達が敵であり、今戦う事を。

「羽間。悪いけど」

光は鞘から1メートルを越す長い刀を取り出す。

「契烏丸ちきうまわ。歴史に抹消されたこの秘刀は雷を切り裂き、操る。俺の手で実現できるよ。

痛い人と思わないでよ。ニコル・チルトレン 楓も皆もそうだから」

その刃には青い白いが電流が流れる。

「エンチャント（付加）された武器。でもマジック・ウエポン（能力作用武器）かな？」

元々そういう武器だったし」

マジック・ウエポン。

能力に相性のある武器が能力により作用されている事。

ほとんど伝説級の武器や物に出来る芸当である。その力はただの武器にエンチャントされたのより強力だ。

「戦うよ。敵同士だからね」

野山は構える。それは刀を右手で持ち、肘を曲げて後ろに引くようにして左腕を前に。突きのスタイルをする。

「……ああ」

羽間は両手で木刀を強く握って構える。戦う事は避けられないと分かって。

「いくよ」

瞬間、羽間の前へ来た。野山の後ろからは野山がいた位置まで電流が床で流れて飛び散っていた。さっきの高速移動だ。刀は突き。羽間は反応して木刀を横にして刀の突きを防ぐようにする。

ただ木刀で防ぐだけでは刀から流れる電流で体へと流れてしまう。すなわち木刀から発生する波動で受け止めている。バチバチと鳴りながら電流が溢れている。

「さあ、きなよ！」

「……くそ！」

羽間は力強く防いでいる木刀を横に振った。振り払われた野山は宙返りをし、着地をして再び突きの構えをする。

「さすが剣道部部长。でも」

「・・・ク！」

ビリビリと手が痺れる羽間。電流を完全に防ぎきれず、手にきていた。

羽間の波動の隙間を狙った攻撃。それは上手く伝わった。

「この力・・・」

確信した。野山の能力の能力ランク量。

「そう。電光ライトニング Aランク」

Aランク。それは数多くいるニュー・チルドレンで現在100人以上いるかどうか分からない高能力者だ。そんな奴を羽間は戦わないけない。

「驚いた？」

にこやかに笑う野山。それは良かったと思っているように。

「ではでは、いきますよー！」

再び閃光が出た。

その数分前頃の真司 京は。

(後一階だ)

生徒会室は2階。玄関から走って階段を上がった。後は廊下を少し渡って曲がり角の左へ曲がっていけば着くはずだ。2階は電気が付いてなくて少し暗い。俺は走る。曲がり角を曲がった時 ドガンと大きな音と共に左から一直線の炎が目の前を通った。

「な!?!」

俺は驚いて声を出す。隣の部屋の壁は大きな穴が空けられている。その周りは黒く焦げていた。そこから人影があった。やがて姿が分かってきた。黒いパーカーを着込み、そしてジェルで立ち上げたような艶がある赤い髪の男が現れる。

「見つけた!!」

「あんたは……昨日の!」

ゲーセン近くで人を殺し、公園で俺と福山を攻撃して、助けにきた羽間に倒された、宮下 直人。

「やっと、見つけた!!お前も俺達ニコル・チルドレンだよな……殺す!!」

叫び、右手を大きく振った。そこからは波のように炎が出される。俺はすかさず曲がり角の左へ憩いよく転がり込んだ。炎から逃れる。

「クツ……」

俺はすぐに立ち上がる。宮下は曲がって俺から少し離れた所に現れ

た。

「・・・聞く。何で俺なんだ！普通は昨日あんたを倒した奴を攻撃するんじゃないのか？」

あの宮下の行動や言動からの性格を考える、普通はプライドの問題で、この学校にいるだろう羽間を倒しにくるはず。

「あ？決まってるじゃねえか」

宮下は俺を睨みつける。

「能力を使えねえてめえから殺すんだよ！！」

分かった。こいつは最後まで出続ける奴だろう。何となくそう思った俺だった。

宮下は俺をにらめつけながら進んでくる。殺す為に。
俺は後ろに下がっていく。

「それに、あの木刀野郎とは他の奴がやりたがってたからな。殺せばいいんだから、俺が相手しなくてもいいんだよ」

めんどくさそうに説明をする宮下。他の奴？まさか、羽間も襲われたのか？

「まずは何も出来ねえてめえを殺す！」

両手の上に炎が出る。いつでも攻撃が出来るとアピールしているようだ。

俺は考える。この状況をどうにかする為に、どうすればいいか。

宮下は火を出して攻撃をしていく。俺は攻撃など出来ない。出来ることは……。

「逃げる！」

俺はすぐに逃げる。速く。

「あ！？逃げんじゃねえ！！！」

追ってきた！？当たり前だ。見逃したり、そのまま立っているような奴じゃない。

走って後ろを見ながら、襲ってきた火の玉を横に移動しながら走りながら避けて、火の玉が左右真横を通る。

「何にも出来ないなら、そうするしかないだろ！」

俺は走りながら大声で宮下に言う。

「殺す！！！」

何を言っても意味ない。あいつはただ俺を殺す事しか考えていないだろう。

火を出す相手にどうしろっていうんだ。逃げるしかできないはずだ。

「とりあえず！」

俺はさっき使った階段で下に下りる。全力で。

「待ちやがれ！」

階段の上にいる宮下は大きく右腕を振って火の波を出す。迫るそれを避ける為に俺は。

「くそ！」

階段の手すりを飛び越える。ぎりぎりですべて避けたが、とっさの行動で飛び降りた為、上手く着地が出来ずに階段から転がる。

「いつ……」

俺は何とか立ち上がった。少し体を打ったようで腕や足が痛む。

早く逃げないと攻撃が襲い掛かってくる。逃げ。急いでこいつから逃げるんだ。

俺は体が痛みながらも一階の長い廊下を走ろう。とりあえず隠れる場所に逃げ込めばいいだろう。走る。

(あの奥なら部屋がある)

走っていき、曲がり角を曲がる。もう一回曲がり角を曲がっていけば隠れやすい部屋があるはずだ。後ろからは速い足音がしていき、追ってくるのが分かる。

「逃げるんじゃないええ……いや！逃しはしない！！」

「な!?!」

俺の前に火で出来た大きな横長い柱が天井まで上る。そして道は塞がれた。

それはまるで行き止まりのように。逃げ場は無くなった。

「デッドエンド(死)だな」

宮下はニヤリと笑う。今すぐ俺を殺せると思っているだろう。どうする……俺。

2・6 (後書き)

一日絶対更新を心がけていましたが、中々上手くいかなさそうです。
諦めず頑張っていきます！

羽間と野山は戦う事になった。

野山は電撃を放ち、羽間は木刀から放つ波動で電撃の軌道をずらすように弾いている。

「どうしたの？戦うんだよ！」

野山は数メートル先にいる羽間に向かって右手の平を向けて、5発の電撃を発射する。

電撃は全て羽間へと襲い掛かった。避けようのない攻撃が迫る。

「はあああ！！！」

両手に構えた木刀を大きく横に振った。そこからは大きな波動を放つ。

電撃は全て弾かれた。

「それはフェイク」

羽間の耳元から聞く穏やかな言葉。

数メートル前にいた野山はいつのまにか羽間の真後ろへといた。さっきの電撃を羽間が対処する時に電気による高速移動をしていたのだ。すかさず野山の右足が羽間の背中へ大きく蹴る。

「がっ！」

背中から受けた蹴りで前へ飛ばされる羽間は何とか着地して顔を上げる。目の前には一直線の電撃がきた。右手に持つ木刀を左へ振っ

て波動を放ち、弾いた。また先ほどのようにするのかと警戒をして、後ろに注意を向くが。

「今度は前」

真ん前だ。野山の右手に持つ刀が下から振られた。斬ったのは羽間の持つ木刀。

半分以上の木刀が斬り飛ばされた。斬られた木刀の先は滑らかな平らになっていた。

「木刀無くなっちゃったね」

爽やかな笑顔で言って、野山は後ろへ飛んで着地する。

「さて……どうするかな？」

一瞬で野山の表情は真剣になって殺意が出ている。今までの表情を完全に崩しているようだ。

「……野山。どうして戦わなければいけないんだ？」

まだ納得できない。羽間は戦いながら揺らいでいた。

「決まっている。忌むべきニュー・チルドレンを殺す。それが役目なんだ」

冷酷に言い放つ野山。邪魔な優しさを一切無くした言動・

「その為に君を殺す。殺さなきゃいけない。だから」

突きのスタイルをする野山。やるのは高速の電撃を纏った突きだ。

「戦っている！」

雷光。その名の通りに速く野山が突き進んでくる。狙いは羽間の体の中心。これも避けようがない。そして。

「!?!」

ガキンと音が鳴ると同時に驚いたのは野山。見たのは。

「.....」

羽間が両手に持つ真剣の刀。野山の刀、契烏丸ちぎりかじすまゐを防ぎ、そこからは波動を出して電撃を弾き、電気が飛び散る。

野山が突き進んでくる時に瞬時に斬られた木刀を投げ捨てて、袴の背中の中から取り出していた。

野山は上手く振り払い、後ろへと戻った。

「やっと楽になれる」

取り出した刀を両手でぎっしりと握り構えた。

「知らなかったよ」

目をぱちくりしながら驚く野山。

「間家に代々伝わる名刀、村正むらいまひ。前からずっと隠しておいたのだよ
!!!ここで使わせてもらおう」

はつきりと大声で宣言する羽間。

村正。それは野山の持つ契烏丸と同じマジック・ウエポン（能力作
用武器）。

羽間の能力 波動を大いに引き出せる刀だ。

「おー、それはいいね。まだまだ戦えるって事だ」

さっきの真剣な顔ではなく穏やかな表情で言う。

「あはは。でも、普通だったら捕まってるよね。」

「ああ。だが、俺達は（ニュー・チルドレン）は違うだろ？」

羽間も笑つかのように言う。

「やっと、ちゃんと戦えるね」

「決めた。全力で戦う。迷いはもうない!!」

羽間の全体から波動が放たれる。それは覚悟したと合図のように。
それに僅かながらも野山の刀が震える。

（契烏丸が震えている……。それほどまでの力を出してくるか）

「こい、野山。全力でお前を倒す！」

羽間の目は完全に定めていた。

「いいよ。やるうー!!」

野山。右手に持つ契烏丸の先を左横にして構える。その刀には嬉し
そうな野山が鏡のように映る。
そして凄まじい轟音が学校全体へと伝わった。

羽間と野山は激しい戦いを繰り広げていた。波動と電撃がぶつかり合う。

廊下、いや学校全体が大きく振動していく。

「それでいいの？」

羽間の刀 村正は刃ではなく、裏返しのみねで戦っている。これでは相手を斬りつける事は出来ない。

「一応ポリシーがあるんだ。使いはしない」

この刀は人を決して殺める為に使わない。だから、こうしている。それが代々羽間家に伝わった伝承なのだ。

「では！」

野山は飛び上がり大きく右腕を左横へ振った。長い槍のような電撃がくる。

それも先ほどまで放っていた電撃とは格段に違っている。更に強力になっていた。

「はあああー！」

羽間は刀から波動を放って防ごうとするが電撃が体ごと押しってくる。

「ぐぐうう！・・・はあー！」

刀を大きく左横から振って何とか電撃を弾いたが、手が重く感じる。

「この戦いをする為に加減しておいたんだ。存分に使わせてもらおうよ」

ランクA。その真の実力が今より出されたのだ。

「それでも、俺は！」

羽間は努力をしてBまで上り詰めた。そして更に努力をしてBでも上の方まで上がっている。

Aランクには認定されていないが、それなりの強さがある。対抗してみせる。

「うん。そうしてくれないと困るね」

満面の笑顔で言う野山は後ろへ飛んで着地して左腕を上げる。

「響け、5による電剣を」

詠唱のような言葉を言い終えた時、羽間の上からバチバチと電流が現れ、両刃の剣が5つ形成された。

「降り注げ」

言葉を言い終えた同時にあげた左腕を下げた。そして電剣が全て真下へと落ちた。

「くるー！」

羽間は咄嗟に後ろへ下がる。2本は避けた。3本目の電剣を刀を横にして防ぐ。

4、5本目の電剣が右肩と左肩にかすった。

「クツ!!」

両肩に痛みが走る。野山は刀 契烏丸を斜めに軽く振った。そこからは青白い電撃の斬撃が凄まじい速さで羽間に斬りかかるうとする。

「一切! 轟波!!」

羽間は村正を上から大きく轟音が鳴るほど振った。そこから波動が斬撃の形となって電撃の残撃へとぶつかった。だが、電撃の斬撃が押し切り波動の斬撃を打ち破った時。

「は!!」

羽間は両足から波動を出した。それにより羽間は速く前方へ飛んでいく、刀を両手で右斜め下に向けて構えて。

「ふたぎり
一切! 轟閃!!」

勢いよく下から振り上げた。電撃の斬撃は斬り消される。辺りはそこから飛び散った電気が落ちた。羽間は振り上げた後に着地した。

「やるね。でも」

羽間に雷光の速さで迫る。お互いの刃が交わって、周囲に大きく衝撃を与え、廊下の窓ガラスが何枚か割れていった。二人の顔が近く、

お互いの顔を見ている。

「野山！！！」

羽間は叫ぶ。さっきまで迷っていた自分を振り切り、友に対して、敵に対して放つ言葉。

「楓。もう進んでいるんだ。運命が」

一瞬悲しむかのように言う野山。バチバチと電流が辺りへ飛び散ちつつ鳴った。

それはまるで、悲鳴のように叫んでいるみたいに。

「いくぞ！！！」

羽間は更に叫んだ。野山は反応して、すぐに刀を滑らせて村正を上へ上げさせていき、後ろへ下がった。羽間は波動を足から放ち勢いよく飛び進んで野山の真ん前で両手で構えた刀を右斜め下に向けていた。

「真切しんぎり・・・一徹いつてつ」

ズバツと斜め右上へと振り上げた。波動と共に。羽間の持つ全力全快での攻撃。

全てを斬り裂き。全てを放つ技だ。間一髪後ろへ下がって直撃から逃れた野山だったが波動によって飛ばされていき、横の体制から宙返りして、刀を床に突き刺して着地した。

「はぁ・・・はぁ」

今の技でかなりの気力を使い、激しい息切れを起こす。まだ、戦いは続いている。
次の攻撃をしなくてはいけない。

「……………」

野山は俯く。その表情は羽間からでは見えない。そして顔を上げた。その目には輝きがない。さっきまでの野山の表情とはまったく違う。

(これは……!?)

「いや、すごいね」

すぐに穏やかな表情へと戻った。今出ていた表情と比べると別人のように。

羽間は野山から身震いする凄まじい殺気を表情が戻るまで放たれていた。

野山は制服に付着したゴミを手で払いながら。

「正直驚いたよ」

微笑みながらそう言った。

「さあて、やっと死んでもらうぜ」

宮下から逃れようと逃げたが、現れた火の柱で塞がれて逃げることは不可能になった。

火の柱の熱が伝わり、少しずつ離れるが、そうすると宮下に近づいていく。

絶体絶命だ。

「なあ・・・」

「あ？」

俺は宮下に喋り掛ける。時間稼ぎという事もあるが、俺は聞きたかった。

「どうして俺達を殺す？正義とか言っているが、人殺しがそういえるのか？」

昨日宮下はこの学校の生徒を能力で殺していた。

「確かに俺達は社会に影響するかもしれないが、殺していいわけがない。そんな事していいはずがないんだ」

人を殺してはいけない。誰もが教わる絶対の事だ。そんなの当たり前だと思つが、実際世の中、殺人のニュースなんてほぼ毎日流れている。けど、殺してはいけないと理解している人達はあるんだ。だから殺してはいけない。

「クツクク」

宮下は少しづつ笑い出す。まるで俺を笑い者に行っているかのように。

「本当に何も知らねえようだな。気づいたのが最近なら仕方ないが……それでも殺さなきゃいけない」

哀れむように言ったようだが、結局は俺を殺す事に変わりは無かった。

「ふざけるな！」

否定してやる。

「ニュー・チルドレンだろうが何だろうが、結局は普通の人と変わりは無いはずだ。能力を持っていても、使い方さえ……」

言葉が詰まった。

「使い方さえ、何だよ？」

その先の言葉を聞かせたいように聞く宮下。結局は言えないんだろとも聞いているはずだ。

さっき思ったように人を殺してはいけないと分かる人達はあるが、分かっていなくて殺す人達がいる。

その人がニュー・チルドレンなら……。

「ああ？言ってみる！！」

怒鳴る宮下。分かってた。分かってたけど・・・思いたくなくなつた。俺達ニユー・チルドレンがそんな事をするはずがないと。ニユー・チルドレンであるつと、考え方は違つ。一緒なわけがないんだ。

「そんな事できるか？できねえんだよ！！」

「・・・それでも、そういう人達の考えを直していけば」

「黙れよ！！偽善者が！！」

宮下の咆哮ほろほで俺の言葉の先を潰す。俺は啞然とした。

「んな事が出来るわけねえ・・・出来ねえな！」

俺に迫つていく。怒りの気迫を出しながら。

「知るわけねえだろうが、昨日俺が殺した学生は誤つてサイコキネシス（念動能力）で通行人を血まみれにしたんだぜ。だから殺した」

あの学生が？通行人を・・・殺したのか。そういえば、俺が最初に見かけた時は特に傷とかそういうのが見当たらなかった。火を使っている宮下の攻撃を受けるならば、傷が目立つはずだ。なら、あの血は・・・その学生が殺した通行人のか！

「何も知らないまま能力を使って大切な人を殺した。そんな悲しいことがあるか？あつてたまるか！！」

更に叫ぶ理不尽な死を体験した人々の思いを代弁してみせたようで。

「同じ人であろうが俺は殺し続ける！いなくなるまで！！」

宮下は大きく右腕を振った。それは自身の本当の気持ちを振り切ったと表現するように。

「後悔する前に死んだほうがいいんだ!!」

だから、殺す。大きな事件が起きる前に小さな事件で防ぐ。そういう結論を出したんだ。

「だから……くそつたれな俺達を殺す!!」

どれだけ憎んだんだろう。どれだけ苦しんできただろう。

彼はちゃんと立派な正義を持っていた。それに相応しい意思を考えを。必要悪の正義を。

宮下は歯をギリリと強く噛みしめている。

「死ね!!」

宮下は右手の平を前に出して、火の玉を俺に定めて放つ。瞬間。

バシユつと後ろの火の柱から何かが飛び出して俺の顔の真横を通る。

それは槍の刃が先端に付いた鎖。

それは放たれた火の玉をも貫き、宮下の顔をめがけて進む。

「チツ！」

宮下は咄嗟に顔を左にずらす。右頬に掠って、切り傷から血が垂れる。

鎖はジャリンと空中のまま早く引き戻された。

「誰だ!?!」

宮下は俺の後ろに向かって叫ぶ。そして、火の柱が消えた。そこにいたのは。

「京君？」

刃が付いた長い鎖を持った如月先輩と隣にいる板垣生徒会長だった。

2・9（後書き）

誤字や脱字があったりするので、たまに編集し直したりする所があります。

本当に余裕がある方は改となっている所を読み返してみてください。

現れた二人。板垣生徒会長と如月先輩だ。俺に近づいてきた。

「なぜ君がここに？」

「もしかして、京君もチルドレンなの？」

おそらくニュー・チルドレンの事を言っているんだろう。それを知っていることは二人もそうはずだ。

「はい・・・会長達もそうですよね」

「そうだ。俺と綾菜はニュー・チルドレンだ」

会長が迷い無く言う。やはりそうだったか。

「ええ・・・。楓君は知っていたけど、あなたもそうだったなんて全然知らなかったわ」

「羽間の事を知っていることは、仲間ですか？」

「いいえ、彼らの仲間じゃないわ。楓君を知っていたのは結構前からよ。さっき勧誘したばかりだけどね」

勧誘？どういう事だ？

「チツ、他にもいるって聞いたが・・・てめえら二人か。いいぜ、まとめて殺す」

俺達の会話に割り込んだ宮下が言う。

「あいつが襲ってきたのか？」

会長が視線で宮下を指しながら俺に言った。

「・・・はい。ラストっていう組織で」

「なるほど。ラスト、か。相手をする必要があるな」

会長は言い終えた後、俺の前に立つ。続いて如月先輩も会長の隣に移動した。俺は二人の背中を見る。ラストの組織を知っているのか？

「害を行っているのは間違いないな」

「なら、やりましょう」

如月先輩は先端に付く長い鎖を持ち上げる。あれを武器に使っているんだろう。

「何だ、てめえ？そこまで殺されたいか？」

両手の平の上に火の玉を出した。会長は大きく息を吸って。

「ハッハハハハ！良い根性をしているそうやないか！」

勢いよく笑う会長。やっぱり暑苦しいな。

「君の目を見れば分かる。揺ぎ無い意思を持っている事を。だが、それでいいのか？」

会長はまっすぐ宮下の目を見て問う。

「いいに決まってる！！てめえらを殺す事をな！！」

さっきの意志を見る限り、誰が何を言おうと、彼は俺達を殺す。どんな敵であろうと。

「いいだろう！相手をする！！」

会長はビシッとガッツポーズを取って言った。

「だが・・・悪いけど。俺はお前を殺すどころか消せる」

・・・会長の雰囲気が変わった。今まで見たこと無かった迫力を出しながら、そう言い放つ。

「・・・やめてー！」

如月先輩が会長にしがみつく。まるで悲願しているように。

「私がやるわ」

如月先輩は数歩移動して前に行き、鎖を両手で持って構えた。

「彩葉、分かってくれるな？・・・やる時はやるぞ」

「ッ・・・！」

如月先輩は強く鎖を握り締める。俺はただ二人を見ているだけだった。

「女だろうが、殺す」

宮下は強く如月先輩を睨んだ。迷うことなく殺すと。

「甘くないほうがいいわ。私もチルドレンよ」

如月先輩は軽くウィンクする。戦場にいようが、その仕草を普通にやっているだろう。

「下がっている」

会長は如月先輩から数歩下がって俺に言う。俺も会長の言うとおり数歩下がった。

「気をつけてね」

如月先輩は右手から鎖を宮下に向かって投げつける。勢いよく投げられた鎖は速い。先端には刃が付いている。

宮下はすぐに反応して、避けようと左へ避けようとする。鎖はそのまま横へ通りすぎようとしたが。

「ッ!？」

驚く宮下が目にしたのは、曲がって宮下に向かって襲う鎖。それはまるで操作しているみたいだ。

そのまま鎖は宮下の右腕に絡んだ。宮下と如月先輩は鎖で繋がれた。

「く……てめえ」

予想外の事に驚く宮下は如月先輩を睨みながら言う。如月先輩は微笑んで。

「これが私の能力 アイアン 錬鉄操作。どう？」

あの鎖の操作は如月先輩の能力だった。

2 - 10 (後書き)

たまに誤字や脱字があったりするので、
編集しなおしたりする所があります。

本当に余裕がある方は改となつている所を読み返してみてください。

宮下の右腕を絡んだ鎖はだんだんと締め付けていく。

「どっ？きつくしてあげるわ」

鎖を持ち宮下の反応を伺うき如月先輩。

「ああ・・・そうか・・・ああ、そうか!!」

大声で叫ぶ宮下。

「それなりの能力だな!!けどよ・・・なめるな」

宮下は左手を右腕に絡まった鎖を握る。

「火能力はただ火を出すだけじゃねえ」

その言葉を聞いた時、理解した。

「如月先輩！鎖を放してください！」

俺は如月先輩に言う。

「ッ!？」

けど、如月先輩は両手の鎖を放したが、放し遅れてしまっていた。如月先輩の両手の平を見ると・・・火傷している。宮下が行ったのは。

「熱。俺の体から直接高温の熱を出す事が出来る。触れれば大火傷つまり、触れた鎖に熱を伝えて、てめえまで熱が伝わったんだよ！」

放された鎖のせいで、右腕に絡んだ鎖を解いた。

「昨日はああだったが……ちげえんだよ！！俺の力でねじ伏せてやる！」

右手の平から火の玉を出して、それを右手に覆わせた。それは手刀の炎になっている。

「彩菜！！」

会長が如月先輩に呼びかける。

「……大丈夫よ。私は」

如月先輩は何とか両手で熱が無くなっているだろう鎖を弱く握る。

「分かった。なら、次は使わせてもらっぞ」

使う？会長もチルドレンなら、何か能力を持っている可能性がある。それを使う気か？

会長に言おうとした時。

ドシャアアアン！！

耳を塞ぐ程の大きな雷の音を聞いた。上階の窓ガラスが割れる音も

聞く。

廊下・・・いや、学校が揺れている。上からはバチバチと電気のような音が鳴っていた。

「あいつか・・・まあ、殺せばいいけどよ」

宮下ははき捨てて言う。おそらく、羽間が戦っているんだろう。

「こつちも殺すぜ!!」

宮下は走って如月先輩に向かってきた。如月先輩はすぐに反応して両手に持つ鎖を放って宮下の肩辺りに襲い掛かった。2つの鎖の先端の刃が襲う。

「その高さなら!!」

宮下は大きくジャンプして鎖を飛び越える。鎖は瞬時に操作されて宮下へ向かおうとするが。

「!?!」

宮下はすでに如月先輩の前にいた。鎖が宮下を襲えば、誤って如月先輩を攻撃する。

宮下に向かった鎖は瞬時に如月先輩の両手に戻った瞬間、如月先輩の右肩を火の手刀で切り裂いた。

そこからは血が出血する。それを避けるかのように宮下は後ろへ少し下がった。

「は!これ・・・で!?!」

宮下の目の前には不適に笑う如月先輩がいた。その両手には鎖。

「甘いわ。坊や」

鎖が放たれた。至近距離から宮下の両肩に先端の刃が刺さる。

「がああ!?!」

宮下は驚愕の顔をしながら鎖によって投げ飛ばされた。そして肩に刺さった刃を引き抜き、鎖を両手に引き戻した。

「ぐ……!!」

数メートル先に投げられた宮下は立ち上がった。両肩から血がぽたぽたと流れている。

「てめえ……どうしたんだ……?」

宮下は如月先輩に問う。俺はすぐに如月先輩見る。見た瞬間、俺も驚いた。

如月はさっきの宮下の火の手刀で右肩が切り裂いて、大火傷、そして血が流れていて。今もそうだ。

だが、完全に傷が見当たらない。如月先輩の両手を見ると、その両手の火傷も完全に無くなっている。

つまり……無傷!

「残念だったわ。ずっと今を狙ってたのよ。でも……出来れば使いたくなかった……!」

惜しむように嗚咽のような声を出す如月先輩。どうしても本当に使

いたくなかったと思っていたようだ。会長は静かに目を閉じて如月先輩の声を聞いていた。

2 - 1 1 (後書き)

たまにキャラの名前を間違える事があって戸惑います。
そうならないようにきちんと確認してから書いていきます。

真司と羽間がそれぞれの敵と接触したとき、時間は夜に近い。

下校する学生が溢れる街のとある高いビル10階の一室。そこには福山 滲という昨日慎司 京を助けた子である。

彼女はXという殆どニュー・チルドレンで構成された組織に所属している。活動内容は主に世の手助け。そしてニュー・チルドレンを守る事。

それらを福山は聞いた。だからこそ彼女や羽間等が入ったのだ。

「どういうことですか!？」

バンと机を両手の平で叩く。目の前には座っている男がいた。黒いスーツを着ており、髪はオールバック。

年齢は40代を過ぎており、顔にはいくつかしわがある。男からは幾度の高い経験を積んでおるような貫禄を感じさせた。

「現在、水無月高校で高い空間遮断が行使されている。現時点で無理やり入る事は出来ない。

君の携帯から羽間に連絡出来ない事となると、羽間はいる可能性がある
ある」

淡々と述べられる現在分かった事。

「高レベルの力や他の能力が発現されていました。とても危険なのは分かっているですよね?なら、なんで動かないんですか?」

福山は強く言う。一刻も早く助けたいと。そして同時に真司 京の事も思っていた。彼は生徒会の仕事で、おそらくこの時間帯にいて、

巻き込まれているのではないかと。

「言ったはずだ。無理やり入る事は出来ないよ。まして、お前の能力、力では何も出来るはずが無い。そうだろうか？」

「ッ……！」

その事実を聞いただけで拳を握り締める。

「これ以上用が無いなら戻っている、福山 零」

「……くっ！」

走って部屋から部屋から飛び出していく。エレベーターを使わず、階段を急いで下る。向かう先は水無月高校。

このビルから走っていけば15分は掛からないはずだ。今装備しているのはスカートで隠れるように付けている両足のホルダーに入れているハンドガン2丁。

それ以外は煙を噴射する携帯電話。急いでいた為、ろくな装備をしていない。

（まったく役に立たないわね）

きちんとした科学兵器を取りに行こうにも、こうして急いでいる以上、時間は無い。

今出来る事は早く水無月高校に着く事だ。その時の状況から考えていこう。

大丈夫。私の^{オールメモリー}完全記憶があれば、いくらでも対処出来る考えが練れる、と彼女は思う。

とある広いモニター室。マスターが愉快そうに羽間、真司、如月達の戦闘を見ている。

隣には秘書のようにいる研究服を着た女性も見ていた。

「いやー。それにしてもアレだね」

マスターは顔を横に向けて彼女に言う。

「アレとは？」

「こづいうのは、俗世間で言う中二病のようだ。ハハ」

笑うように言う。

「実際世間の皆は、信じられないぞ。こんな小説とかしか出てこないってね。面白い面白い」

はあと呆れ半分で女性。

「いつも言っているじゃないですか」

「ああ」

マスターはわずかに口元に笑みを出して。

「仕方ない」

如月 彩葉は完全に無傷。制服すらも切れていない。

「ぐあ……!」

両肩を刺されて引き抜かれて、床に多くの血を流す宮下。

(治っているだと……!あの野郎がやったのか?……治療^{ケア}か?)

様々な憶測をするが、一瞬で傷を治す事は余程の高ランクではないと行えない。

それも如月に触れずに。

「はあ……はあ」

だが、いくら考えようとこ体では対抗する事はあまりに無謀。

(殺す……必ず殺す)

そう思い、その思いを実現する為に。自分と同じ思いするニュー・チルドレンを出さないように。

「俺はやる!」

咆哮する。自分が出る事をやる為に。

咆哮して、血を流しながらもこっちに向かってくる宮下。

如月先輩は悲痛な顔をしたが、すぐに元の表情に戻っていた。あの無傷といい、一体何が……。

「約束。これで終わらせるから」

静かに呟いた如月先輩の声。

「……………ああ、頼むぞ」

会長もまた静かに呟いた。本当に終わらせてくれと願っているみたいで。

「あああああ!!!」

両手の平から火の玉を如月先輩に向かって放つ。合計2つ。あの傷で尚もこれほどの力を出すとは……。

「終わらせるわ。あなたを」

妖気に微笑んで言った後、鎖を投げ放つ。向かうのは火の玉。凄まじい速さで火の玉を先端の刃で貫いて、吹き飛ばす。そのまま鎖は進んでいき、右の鎖は右の壁に刺さって、左の鎖は左の壁に刺さる。刺さった両方の鎖に引っ張られた如月先輩は高く飛んで行く。宮下とは3メートル。

如月先輩は空中のまま壁に突き刺さった鎖を引き戻す。狙うのは……まさか!?

「おい！！京君！」

会長の声を聞かずに俺は走った。向かうのは宮下の元へ。

如月先輩は、肩膝を床につく宮下の目前に舞い降りて、狙う所を定めて両方の鎖を放つ。

だが、鎖は直前で緊急停止を行う。両腕を横に広げる俺の腹部の直前で。

「あ……………」

「……………何をしているの？」

驚く宮下の声と、冷たく聞こえる如月先輩の声。

「如月先輩。何で心臓を狙うんですか？」

あの鎖は間違いなく宮下の心臓に刺そうとした。この至近距離で2本の鎖が宮下に胸に刺されれば、間違いなく貫かれていき、死んでいく可能性がある。それを如月先輩は分かっているはずだ。

「殺すのよ。どいてくれないかしら？」

また冷たく言い放つ如月先輩。だが、俺はどかない。

「何でですか？」

なぜ殺さなきゃいけない。

「この人達は私達を殺そうとした。だから、私達は殺す。それが最善の方法なのよ」

「最善……ふざけるな！」

俺は強く叫ぶ。今まで一度も反抗した事のない如月先輩……そして殺そうとした行動を許している板垣会長に対しても。

「京君」

会長は俺に近づく。いつものふざけている会長のその目は真剣だ。

「我々は世界を危機にしているニュー・チルドレンだけ殺す。そうすれば、チルドレン達は平和になれるのだ。だからこそ、今彩菜は殺そうとした」

殺せば平和になれる？

「ふざけるな!!」

もう一度叫ぶ俺。会長と如月先輩は少し驚くように聞いた。

「殺せば平和になれる？そんなのラストと変わらない。悪だけを皆殺しにして、自分達だけが良く生きようとしているなんて、それでいいはずがない！何も変われやしない」

そんなヒーローみたいなやるのは間違っている。宮下がニュー・チルドレンを殺す揺るがない意思があるなら。

「絶対に殺さない！殺しはしない！これが俺の揺るがない意思です」

俺は振り返る。そこにいるのは、かなりダメージを負っている宮下。

「くっ………てめえ」

激しい憎悪を込めた目で俺を見る。

「あんたも同じだ。だから」

俺は手を差し伸べる。

「どんな理由があつても、絶対に殺してはいけないんだ。だから、あんたもそうしてくれ。また過ちが出る前に」

頼む。それが精一杯俺が言える事だった。

「………チツ！」

パシンと差し伸べた俺の手を叩く宮下。

「くそが!!」

宮下の前の床の横全体から火が飛び出した。俺は後ろに下がって、しりもちをつく。

火の柱はあの時俺の道を塞いだように俺と宮下の間を塞いでいる。数十秒後、火の柱は消えた。向こうにいた宮下は消えていた。逃げたみたいだな。

「………」

分かってくれなかったか……。

「見逃してしまったぞ」

会長は俺の横にくる。その目は至って真剣に俺を見ている。

「どついつ事が分かつているな？」

く……まさか俺を殺すのか？その可能性はさっきの会長の発言からすると読み取れる。

如月先輩も会長の隣にいる。逃げられない。

「さて……」

会長は右手の平を自分の腹部に当てる。何かしてくるか？どつする？

「面白いな！！ハハハ！！」

……え？

「ほんと、いきなりあんな台詞言い出すなんてね」

二人とも笑い出す。会長は腹部を先ほど当てた手の平で押さえながら笑っている。

「ああいう台詞はアニメやライトノベルとかしか出てこなさそうなくさい台詞だぞ！

それを堂々と惜しみなく言えるとは大した奴だ！！グッジョブ！」

親指を突き出して言う会長。

「はぁ……」

もう何がなんだか、分かんなくなった気分だ。少し恥ずかしい感じもしてくる。

「私達は休んでいるから、楓君の所に行ってあげて京君」

「既には静かになっているぞ。では、頼む！」

さっき電気のような鳴っている音は聞こえなくなった。もう終わったのだろうか。

「分かりました。けど、聞きます」

俺は会長と如月先輩に向かって言う。

「さっきの言葉、聞いてくれましたか？」

殺してはいけないと。

「一応考えておこう。な、彩葉」

「とても痺れる言葉だったわ」

「お願いします」

俺はそう言って踵を返し、走った。向かうのは上。

ふと思った。今、会長の右袖が半分くらい少し太い切れ目があった事に。現れた時は無かったはず。

会長は戦闘に一切加わっていないはずなのに。

2 - 1 3 (後書き)

タイトル間違っていましたので、直しました。
以後、気をつけていきます。

戦闘を行っている羽間 楓と野山 光^{ひかり}。お互いの5メートルくらいだ。

野山は床に刺さった刀 契烏丸^{ちぎりからすまる}を左手で引き抜いた。

対して野山は電撃の剣を両肩に掠りながらも受けており、ダメージを負っている。

そして自身が使う最大限の技を使ったばかりだ。戦えるかどうか分からない。

「さて」

野山は左手で刀を横に構えた。

「ッ!!」

攻撃がくると分かり、羽間の刀 村正を構えようとするが力が入らない為、防げるかどうか分からなかった。

だが、野山は動きを止めたまま。何か思考をしているように見えていた。

(『……時間？え、彼が？』)

野山は頭の中で誰かと会話する。念話能力^{テレパシー}。その能力者を介して野山は誰かと念話している。

(『なるほど。うん、分かった。ここまでにするよ』)

念話を終える。構えた刀を下ろした。

「ここまでだ、楓。続きはいつかやるっ」

近くに置いてある鞘を刀に納めて、野山は踵を返して進んで行く。

「待て！！野山！」

振り絞って叫ぶ。まともに野山の元へ行ける事が出来ない足で必死に立ちながら。

「半年近くの付き合いだったけど、楽しかったよ。本当に」

優しい声だけしか帰ってこなかった。野山はそのまま廊下の曲がり角に曲がって姿が消した。

羽間以外誰もいない無音の廊下だけだった。

広いモニター室。

「失礼します」

いつもマスターの側近にいる女性が入室する。本人は研究者であるが、マスターの秘書の役割みたいになっている。ちなみ彼女はあまり気に入ってない。ついでに言うと、本来はタメ口を言う仲なのだが、マスターいわく「こういう方がそれっぽいだろ？」という事で、マスターの命令で嫌々も敬語を使う。

もうそれに慣れてしまっているが、やっぱり何となく気に食わない。

「今回の処理は任せています。いいですか？」

椅子に座るマスターの後ろで報告をする。水無月高校で起きた事を示しているだろう。

「勝手に処理してくれる」

聞こえるのはマスターの声。椅子に座りながら女性に振りかえらな
いまま言ってくる。

「分かりました。それでは」

「勝手に処理してくれる」

ん？と女性は疑問に思った。さっきと同じ言葉だ。
椅子に座るマスターの横に移動して、覗き込んでよく見ると……。

「え？」

マスターに似た精密に出来た人形だった。声は口の中にあるレコー
ダーから出ている。

「……はあ」

人形を見て呆れた。あの人は好き勝手すぎると思いながら。

学校から数十メートル離れたマンションの屋上。そこには帽子を被り、インテリな眼鏡をかけている男がいた。

「あー終わった！」

学校に展開させた空間遮断を解かした。深呼吸を何回かしていると。

「お。帰ってきましたか？」

彼の前に現れたのは鞆を持つ少年。

「ただいま」

爽やかに応える野山 光。

「いや〜。無事で何よりです」

パチパチと拍手する眼鏡男。本当に嬉しそうに言う。

「彼は？」

「あー、宮下さんなら逃亡しちゃいましたよ。まあ、仕方ないって事ですが」

偏った眼鏡を指で直して。

「連絡だと放っておけと伝えられましたよ」

眼鏡の奥からは至って真剣に見られた。

「うん。それなら終わりだね」

納得したように言い終えた後。

「それじゃ。一緒に休憩しよ」

野山は眼鏡男の肩を叩きながら言う。お疲れ様と表現するように。

「そうですね。早く休みましょう」

眼鏡男は帽子を深くかぶる。まるで汗を隠しているみたいだ。

(本当に・・・やってくれたね。何がポリシーだよ。最後は使ってるじゃん)

最後の羽間の攻撃ではみねの方ではなく、刃を使っていた。

直撃だったら間違いなく重症・・・いや、死んでいた。

野山の右腕の袖から血が流れていく。地面に付かないようにそっと袖をおさえていく。

誰もいない廊下で羽間は静かに呟く。

「どうせ、あれをやっても死ねる奴じゃない・・・くっ・・・
まだまだか。情けない」

悔しがるように言い、壁に背中をくっつけて目を閉じた。
向こうから誰かが走ってくるような音を聞きながら。

福山 零はビルを飛び出して行って十分かけて水無月高校の校門へとたどり着いた。
少し息を整える。

(え・・・?)

携帯を取り出して液晶を見る。この携帯には半径100メートル以内の能力をわずかながらも感知出来る機能がある。だが、感知はされていなかった。さっきまではしていたはずだが。

(終わっているって事?)

そんな事を思いながら構内へと入る。早く彼らに会う為に急がなければいけない。

会長達と別れて、階段を駆け上がる。ちなみにさつき宮下との戦いで階段から転げ落ちたので、体中がズキズキと痛んでいる。ちゃんと走れやしない。3階に着いて、廊下を少しずつ進んでいく。曲がり角を曲がろうとした時。

「！」

いきなり目の前に誰かが現れた。俺は反応して一步下がる。

「真司先輩ですか」

羽間だった。着ている衣はあちこち擦り切れている。肩の所も少し黒焦げている。

「大丈夫か？」

俺は羽間に近寄る。

「少し戦っただけですよー。さつき終わりました。どこか行ってしまっ」

静かに言う羽間。この様子じゃあ大丈夫みたいだ。

「真司先輩も傷だらけじゃないですか。それに動きがぎこちないですよ」

俺の体を見ながら心配そうに聞いてきた。

「さつき昨日の火の能力者と戦ったんだ」

「それって・・・やばくないですか？」

「いや、会長達が来てくれて助かった。最後は俺のせいで逃げられただけだな」

「会長達が・・・そうですね。しょうがないですよ。いきなり襲ってきたから」

羽間も会長達がニュー・チルドレンだっていう事知ってるようだ。

いきなり後ろから誰かが来る足音がした。俺達は振り返る。

「はぁ……はぁ」

その足音は止まって、俺達の前にいたのは福山だった。急いでいたようで息が少し切れていたようだ。

「無事……じゃなさそうね。何が起きたの？」

福山は俺達に問う。この水無月みなづき高校で起きた事を。

街中の夜の暗い裏路地を一人の少年がゆっくりと歩きながら通っていた。

宮下 直人。先の戦闘で如月 彩菜の能力 錬鉄操作アイアンと謎の一瞬完治により倒されてしまった。確実に殺されると本能で分かった。だが、あの何にも出来ねえ野郎が目の前で俺を庇った。

何故だ？自分を殺そうとした敵だぞ？何故庇う？それに滅多に現実じゃあ言えねえ言葉を吐いて俺に手を差し伸べた。意味が分かんねえ。意味分か……ねえ。

「クツ……」

路地裏の壁に座り込んだ。

刺された両肩が痛む。血は少しながらも流血している。

「……あ？」

右からコツコツと足音が聞こえてくる。見ると何も見えない。それはやがて人影となって姿を現した。

180以上の高身長に青いスーツを着込み、顔は……馬の顔のお面を付けていた。

こんなふざけた事をする奴は宮下の知る限り一人しかいない。その名は。

「マスター……か」

「やあ、お久しぶり」

右手を上げて宮下に向かって言うマスター。先ほどモニター室からこちらへ来た。

「何の……用だ？」

肩の痛みのせいで途切れながら言う。

「君は、これで何か分かったかね？」

「……」

何にも言えなかった。分かった事は何も無いが。引っかかりを感じた。

「君はあの時と今を比べるとどうなるかね」

あの時……俺がこの一力（能力）のせいで大切な人達を失った事。

家族は俺を含めて4人だった。母、父、兄、俺。
ニユー・チルドレンは遺伝子操作で生まれていても、母と父の血は繋がっている。

そうじゃないケースが多くあるが、俺は本当の家族といわれた。小学校をそろそろ卒業しようとした時、親友と家で遊んでいた。ふとした事で喧嘩となってしまう。俺は小さいときからニユー・チルドレンだという事、能力スキルの事を知っている。だから喧嘩の時に勢い誤って使ってしまった。多分制御出来なかったんだろう。友達を焼き殺すどころか、家全体を燃やした。たまたまいた家族3人も巻き込まれてしまい、生き残ったのは俺だけだった。数週間後病院から退院して見たのは瓦礫だらけの家。

俺は泣いた。自分の過ちを憎みながら。そこで現れたのが、ふざけたように狐のお面をかぶったマスターという奴だった。聞いた事がある。俺達を管理する人と。
ニユー・チルドレン

「君の願いを叶えてやろう」

最初に聞いたのはその言葉。俺は迷わず言ったんだ。

「こんな思いをしない為にクソツタレな俺達を殺す！」

「いいだろう、君を支援してあげよう。ただし制約してもらおうぞ」
マスターが告げた制約。それは。

「宮下 直人。君の能力スキルを1ランク下げる」

能力には一ランク（能力量）がある。強い順にA〜E。宮下の本来のランクはBであり、Cに下げられる。

一見近いように見えるが、ランク一段階の差は大きい。

彼の能力に例えるなら、Eは一般家庭用のガスコンロの弱火から中火まで。

Dが最大で強火で手の平の指の根元までである。Cで手の平ほどの大きさの火を出す事が出来る。

Bは火炎放射を自在に出せる程の強力な力を秘めている。

その制約を守り、マスターの支援を受けてニュー・チルドレンを殺す組織ラストに入った。

宮下はかすかに息してマスターに言う。

「あの時の俺とは……もう違う。後は……好き勝手やる」

「そうか。なら、制約は無効だ。制限を解かす。今の君なら制御できるだろう」

その時に宮下は何かを感じた。今まで押しつぶされた体が元に戻るように。

体中から火の能力がちゃんと流れていくと。

「では、病院を手配しといたから、治ったら後は勝手にやりたまえ」

マスターは踵を返して右手を振りながら、街の道路へと出た。馬のお面つけたままで。

宮下は夜空を見る。星がいくつつかあって綺麗に輝いていた。

「意味分かんねえよ……ただ守りたかっただけ。それだけなの
に」

宮下の行動の本当の原動力はそれだった。

福山に詳しく説明する為に学校から出た俺達。会長と如月先輩は既にいなかった。

羽間からは、あの二人については福山に言わないでくれと口止めされた。あの二人はXと関わっていないようで、二人で活動しているという。

現在は福山達が所属する3階建てのXの支部という水無月高校からは5分くらい歩いて離れた場所にあった。本部はもつと近くにありそうだが、福山が無断で出て行った為、福山が管理しているこの支部になった。俺達は3階にいて、パソコンがいくつか置いて、その他の機材が多くあり、福山は椅子に座りながらパソコンを操作して、俺と羽間は福山の後ろで椅子に座る。

「電光石火の野山 光・・・ね」

画面には先の戦闘で羽間が戦った人の顔と少しのプロフィールが載っていた。

電光石火。閃光を放ち動作を素早くする事。その名の通りランクAの電気能力の彼が扱える業だ。

「今更記録上にちゃんと載せられても困るわね。

データ内では、今まではひっそりと隠れていたようで、偽名でいたようだし。それに・・・ランクAなんてとんでもないわ」

ランクAの能力を持つのは少ないようだ。羽間のあの波動でランクBだと、Aランクならどれほどの力があるか。

「まさか野山がラストに入っていたとは」

羽間が画面を見ながら言う。

聞いた話によると、その野山と羽間は入学時以来の友人だ。騙されていた、か。何とも言えないな。

「あまり載っていないようだから、しばらくしたら本部に問い合わせるね。それと」

福山は俺を見る。

「宮下 直人と戦闘したって言うけれど、あなた一人だったの？それにその傷……」

羽間から視線の合図を受ける。あの二人については黙っていると。ここで言う事は。

「逃げ回っていたんだ。この傷は逃げる為に階段の手すりから飛び降りて転び回って出来たんだ」

「そう……大胆な事するね」

福山は椅子から立ち上がって、じろじろと俺の体を見回す。あの……そんなに顔を近づいてくるな。

「そうして逃げ回って振り切ったんだ」

「あの男が見逃すと思う？」

やはりそう言うか。確かに逃げた相手を放っておく事は出来ないな。俺は少し羽間に視線を送る。ここは俺の話題に合わせろと。

「おそらく・・・時間切れだったんだ」

「時間切れ？」

「ここはそうだったかなと曖昧に言う。断言すれば怪しまれるからだ。

「確かに俺と野山が戦った時も、野山からは戦闘を中断しました。終わった直後に真司先輩が来ました」

「こちらは真実。なら、辻褄が合う。宮下が逃げた時に羽間の戦闘も終わっていたようだ。

偶然・・・いや、おそらく宮下の行動に合わせていた可能性があるな。

「そういう事なら、多分時間が定められていたようね。目的は分からないけど」

福山は羽間を見た後に俺を見て。

「時間取らせて悪かったわね。治療したし、来週までには治るわ」

「ここに来てすぐに福山からマニュアル通りのような治療を受けて、さっきよりは痛みが引いた。」

「明日は学校だけど、ここで泊まっていく？」

「いや、大丈夫だ。それに用事があるから、行かなかつたら怒られそうだし」

今日も美里の家で夕食を取らなければいけない。生徒会の仕事もあるから遅れるって言っといたし、この傷についても普通に階段から転んだって言えば大丈夫だ。ださいけど……。

「ふーん。もしかして美里ちゃん？」

「福山は美里を知ってるのか？」

こつ忸えたけど、一瞬何か福山の声から嫌な感じを受けた気がする。

「あたしも保健委員だから時々喋るわよ」

そういえば、美里も保健委員だったな。福山もそうだったのか。

「名前で呼んでるって事は結構良い仲なの？一緒に帰ってるようだし」

何か威圧を感じるのはいのせいなのか？とうか、隣の羽間は何故にやにやしながらこつちを見る。見るな。

「子供の頃から一緒に、お爺さんが亡くなってから夕食をたまにたまに食べているんだ」

「それってこの後？」

「そうだけど」

な……何か息苦しい。早く出よう。

「じゃあ、俺は失礼するよ。治してくれてありがとうがとうな」

「え？そう・・・分かったわ」

何かしょんぼりしたように言う福山。事件の事で忙しいんだろう。無理をしなければいいが。

「真司先輩。また明日学校で」

「ああ」

俺はこの部屋から出て扉を閉める。はあく、今日もさんざんな事が起きた。

とりあえず早く帰ろう。そういえば、俺と美里が帰っているのを知ってるって事は福山は前から俺を知っていたのか？

真司が部屋から出て行った後。福山 零れいはその扉を見ながら。

（はあ、何であたし嫌そうな感じに言ったんだろっ？）

真司から聞いた、この後の用事からそういう風になってしまった。

（ああもう。今はさっきの事件について調べなきゃ）

何かを振り切るように、椅子へ座った。置いてあったコーヒを飲もうとした時。

「そういえば、来週は文化祭だった気が」

手を止めた。

「あ、そうだったわね」

水無月高校の文化祭は来週の土日。今はその準備中だ。
零が頭に浮かんだのは真司 京。

(え?・・・どうして?)

一瞬戸惑うようにするが。

(でも、あれよね。さっきの事件の事もあるし・・・そういう意味で一緒に文化祭で回った方が・・・)

あれこれと考えてき、文化祭で真司と回っていく想像をする。

「零先輩」

ふいに羽間に呼びかけられる。想像を止める福山だったが、せっかく良いところなのだと思うって振り返る。

「どづしたの?」

「このパソコンでアニメ見て良いですか?」

「・・・文化祭に行けなくしてあげるわよ?」

福山は銃を取り出して無防備な羽間に向ける。

「・・・やめます」

福山は銃を机に置いてニュー・チルドレンのデータベースを閉じた。彼女は目を通していなかった。情報が変わった宮下 直人のデータを。

第2章 終了

2 - 1 6 (後書き)

コメディ要素を多く取り入れていきたいです。
がんばります！

間章

エックス
Xの本部がある。街中にある高いビルにあるが、その存在は一般の人達には知られずに表向きにはオフィスビルとしてなっている。そのビルの一室では一人の男が椅子に座っている。
日下部 くさかへ 純 じゅん。黒いスーツを着込み、40代を超える外見からは貫禄を感じさせた。彼はXの幹部といった地位に所属している。ドアからノックが鳴った。

「入りたまえ」

その声を聞いてドアを開ける。現れた人物は

「お久しぶりですね」

右手を上げながら挨拶する男。マスター。ニュー・チルドレンを管理する者だ。

「半年振りだ。ほとんどは通信しかしてこなかったな」

日下部は両手を机に置いて言う。

「色々と急がしかったんですよ。人気者は大変です」

あははと右手を後頭部に触れながら言う。

「今回わざわざこちらまで来たという事は、次の事が」

「そうなりますね。今度は色んなグループが交わりますよ」

次の事件の引き金となる物を巡って複数のグループが交わる。その中ではXもいるのだ。

「それに、今度は外国ですよ。いきなりで大丈夫ですか？」

愉快そうに言うマスターだが、日下部が答えるであろう言葉を知っているから言えるのだ。

「問題ない、対処させていただきます」

威厳。その言葉が日下部に合うなと思ってマスターは感心して頷く。

「では、頑張ってください。次も楽しくね」

マスターは部屋から出る。次に会うのは明日かもしれないし、10年後かもしれない。

あるいは二度と会わないという事もある。毎回日下部は彼に会う度に思っている事だ。

日下部は口を開いて言う。

「さて、動いてもらおうか」

次の事件に関わる人物を。

昼に一人の少年が水無月高校の前に立っていた。サラサラの茶髪に色白の肌。日本人にも見えなくもないが、外国人だ。服装は明るい

ベージュ。長い茶色いズボンを着ている。

少年の名はフレン・滝川。イギリス生まれのイギリス人である彼は先日、ここ日本へと来日したのだ。そしてこの水無月高校からは大勢の賑やかな声を聞く。

少し見渡すと、学生たちは何か模擬店らしき物を建てていたり、看板に色塗りをしている。どうやら、近々祭り事を行いそうだと言われている。滝川は彼女起に向かって笑うと、彼女達は顔を赤くして過ぎ去った。

彼の前を通っていく女子学生達はチラチラと見ながら顔を赤くしている、滝川は彼女起に向かって笑うと、彼女達は顔を赤くして過ぎ去った。

そのやり取りを何回かして数分経つと教師らしき男性が現れた。

「待たせて悪かったね。フレン・滝川君だよ」

寝不足をしているのか、教師の目の下はくまが出来ている。しかしそのせいで、教師は間違ったと思った。彼は外国人だ。日本人にも見えてしまったから、つい日本語で言ってしまったのだ。すぐに英語で言い直そうとしたが。

「はい。先日よりこの学校へ転入してきました」

丁寧に彼は言った。イギリス人だというのに、自然すぎる日本語で教師は驚く。本当は日本人じゃないのか？と思うほどに。

教師は英語担当でイギリス英語も分かっている。その為彼を相手にするのだが、自分じゃなくても良かったそうだ。

「あ……うん、そうだね。では、まずは学生服を取りに行こうか。それから少し学校案内して、君のクラスを紹介する」

教師は気を取り直して滝川に案内の説明をした。

「よろしくお願いします」

滝川は爽やかに良い終えた後、教師の後を続いて歩く。

「聞いてよろしいですか？」

教師に質問をする。

「何だね？」

「皆さんは何をやっているんですか？」

辺りを見渡しながら言った。祭り事は分かるが、何なのかは分からなかったからだ。

「水無月高校名物の水無月文化祭だよ。今週かけて土・日に行う学校の祭りを行うんだ。君もすぐにクラスの出し物に協力する事になる。楽しみだろ？」

滝川は準備している生徒達を見る。誰一人なまける事なくせつせと動いている。本当に水無月文化祭を楽しくしようと頑張っている。

「ええ」

滝川は少し間を置いて。

「本当に楽しみです」

フレン・滝川は日本に来日してから初めての特上の笑みをした。

第三章 困惑の水無月文化祭 3 - 1

第三章 困惑の水無月文化祭

「俺達やる事って何だ？」

皆さんが文化祭の準備をされていて、俺と黒宮は特にやる事は無かったです。

生徒会の準備に行けば会長が「俺は彩菜と準備するから邪魔をするな！」と追い出されて、一緒にいた同学年でイケメンで女子に人気があるのだが、非常に残念なオタクの生徒会会計の三嶋からは「では、真司氏のコスプレを決めようではないか」と言われて、速攻で断って教室に戻ったわけだ。

「皆さんの頑張りを温かい目で見送るしかないんだ」

黒宮は虚ろな目で準備をするクラスメイトを見る。

「あ・な・た・達！！」

俺と黒宮の間から俺達の肩を掴ん言ったのは、このクラスの委員長である浦坂 香織^{かおり}だ。

何やらお怒りのようすで。理由は分かっているが。

「やる事は沢山あるでしょ！そんな所で立っていると邪魔よ」

「えー、だって本当にやる事はないぜ。内装の準備はすぐに終わるし、メニューは前日と当日の班で仕入れにいくって決めた。あ・と・は」

ニヤリと委員長の顔を見る黒宮。

「かおつち達女子のザ・メイド!!!」

その言葉が出たと同時に周りの男子からは歓喜の声をする。騒がしいほどに。

「何よ！喫茶店で決まったじゃない！それなのに何でメイド喫茶になつてんのよ！」

そう、このクラスはメイド喫茶をやる事になったのだ。立案者は黒宮。

だが、女子達は反発してお互いの激論の末、普通の喫茶店となったわけだが……。

「甘い甘い!」

右の人差し指を立てながら振る。

「この俺、クラス委員長の黒宮 元気が世界の要望に応えたまで！その為に書類提出に工作をしてもらったわけだ」

こいつがそうしたわけだ。こいつも委員長（実際はあまり仕事していない）で今回はフルに頑張ったわけだ。

ちなみに生徒会に提出した時は委員長もいて工作しようがなかったが、黒宮の同志の三嶋と協力でこつなつてしまったのだ。最悪だな。

「今更言ってもしょうがないけれど、あなた達男子も接客しなさいよ……」

積極はメイド服を着た女子だけがやる事になってしまっている。

「男子は料理に魂を込めて、女子は接客に魂を込めるんだ！！それがメイド喫茶！！」

ワーとまた歓喜が鳴った。俺も一応しておこうとしたが、一瞬後ろから殺意に似た視線を受けたのでやめといた。

(う・・・何だ?)

振り返ったら終わる気がする。

「さあ！まずはリハーサルっていう事でおうちのメイド姿・・・拝見しますか」

ジロジロと委員長に迫る黒宮。

「ふ・・・ふ・・・ぎ・・・けないで！！」

この時、準備に余裕だったのはが前日までギリギリ準備する事は言うまでもなかった。

あの二人に巻き込まれない為にそそくさと教室から出る。

「大変なようね」

教室から出ると、福山がいた。そういえば同学年で違うクラスだったんだよな。

「いつもの事だ。福山達のクラスは何やるんだ？」

「縁日よ。意外に凝っていて、ちゃんと再現されてるわよ」

「へー」

縁日か・・・そういえば去年の夏に美里と行って以来だな。

「楽しそうだし、行ってみるよ」

「え・・・。う、うん。それとさ」

「ん？」

何となく福山がぎこちない。やっぱり昨日の事で色々仕事して
たんだ。

あんまり無理はさせたくないな。うんうん。

「文化祭の日さ・・・」

「ああ、文化祭の日が？」

「い・・・いつ」

福山が言いかけた時。

「けーい」

トンと俺の肩を叩いて後ろから現れた神田 美里。

「どっ？はかどってる？」

「いや、悪くなる一方だよ」

「？」

美里が疑問に思ってる間に福山を見ると。

「い……」

何故か固まっていた。

「どうしたの？零ちゃん」

美里が福山に呼びかける。

「いっ……あ……美里ちゃん」

しょんぼりしながら応えていた。本当に疲れているんだな。

「どうしたの？」

「う・ううん、何でもない」

「美里のクラスは何やるんだ？」

聞いていなかったな。

「ホットドッグだよ。色んな種類があるぞ、デザートもあるよ。一緒に食べようね」

満面の笑みで言う美里。応える事はもちろん。

「ああ、そうしよう」

うう・・・と福山から聞こえた。そこまで疲れてんのか？早く安静にした方がいいぞ。

「パンフレット貰ったら、どこ一緒に回るか決めようよ。そうしないとあまり見れないし」

それに応えて、福山をチラッと見ると、拳を強く握っていた。そこまで力んでる程に疲労と戦っているのか・・・。

「福山」

俺は福山に近づく。

「・・・ん？何よ？」

「福山にあげる物があるんだ」

「え？」

福山は少し驚く。俺はポケットから物を取り出す。

「はい」

その物を福山の手にのせた。

「・・・は？」

「栄養付けた方がいいぞ」

あげた物は有名な栄養ドリンク。朝ろくに朝食を取れなかったから近くのコンビニで買ったわけだが、ここで役に立つとは。

「頑張つてね、零ちゃん。じゃあ、準備に戻るからね。京、今日の夜も食べにきてね」

「ああ」

美里は自分のクラスに戻っていく。

「俺も戻るか。クラスに悪くなるし。それにこのままじゃあ終わらなさそうだし。またな」

何故か俯いている福山だったが、あれを飲めば多少は元気になれるだろうと思って教室へ戻った。

神田と真司はそれぞれの教室に戻っていき、俯いていた福山は。

「何よ・・・」

つと眩き、栄養ドリンクを持ちながらその場から歩いて去っていった。その廊下には誰もいない。

ほとんどの生徒が教室内で準備をしていたのだ。

そして、その場にある一人の女性が来た。気品溢れる顔立ちに、空中をキラキラと光らせるような自然な長い金髪。着ているのはブレザーだが、彼女が着れば舞踏会のドレスにもなれるのだ。

「もうすぐですわね」

彼女がそう言うと、後ろからは高身長の方がいつの間にか現れていた。

顎にまで長く、真ん中で分けられた艶やかな黒髪。顔立ちも整えており、笑みを絶やさない。

着ている物は漆黒のスーツ、そこから分けられたように目立つ白いシャツ。エリートと思わされるだろう。彼女とセットにすれば、こう見えるだろう「お嬢様と執事」と。

「そうですね、お嬢様。大変楽しみと思っていますね」

やはり二人の関係はそうだった。

「当たり前よ。必ず成し遂げるわよ」

気品高く、華麗なる存在レイチエル・ランベルシエは言う。

「はい。ぜひ成し遂げましょう」

お嬢様を慕い、お嬢様を手助けする存在クロイア・ヘイゼル・ユードイクス。

この二人は何をやるのだろうか。文化祭は予想もしない展開となるのだろうか。

第三章 困惑の水無月文化祭 3 - 1 (後書き)

名前再び間違えましたの直しました。本当にすみません。
ちゃんと気をつけていきます。

「まだまだか・・・」

呟く俺。現在文化祭前日の午後6時近く。

既に下校時刻なのだが、俺達クラス全員は内装の準備をしていた。本来はもっと早く余裕で終わる予定だったが、委員長二人の激闘の末に出来た無残な光景を4日前に見せ付けられた事を俺は忘れない。絶対に。なので、予想していた通りにギリギリ遅くまで何とか完成しようとするわけだ。

「だるいだるーい」

作業をやめて椅子に座るのは黒宮 元気。これを招いた張本人の一人だ。

「休めないでさっさと働きなさい！誰のせいだと思ってるのよ！！」

もう一人の張本人の浦坂 香織かおりが激怒する。

「誰のせいだつて」

嫌らしく委員長に向かって言う黒宮。いや、あんたのせいもあるから。

「わ、悪かったわね。だからこうして私達で被害を出した分やってるわけでしょ」

そんな事を言う委員長に。

「じゃあ、委員長。黒宮を殴る為に壊したボードお願い」

「う……………」

「やーい、かおっちー!」

調子に乗っているこいつにも。

「あなたは委員長に反撃して崩れたテーブルを直せ」

「あ……………はい」

すんなりと黒宮は作業に戻った。

クラスの皆からは「あー終わんねえよ!」「間に合うの!?!」「これじゃあ……………」という声が聞いてきた。そんな声を聞いた俺は教壇の後ろに移動して皆を見渡して。

「聞いてくれ」

作業をしていたクラスメイトは俺を見る。

「みんな!確かにこれじゃあ、予定通りに完成出来ないかもしれないけど、ここで諦めたら、もっとダメになるんだ。文化祭に来てくれる人を楽しめる事なんで出来ない!だからこそ、俺達は頑張っ
て俺達なりの出し物を出すんだ!だから頑張ってくれ」

言い終えた後、拍手が送られる。うん、これで良いと思ったら。

「うわー、あんな台詞よく言えるなー」

と黒宮からの言葉。

「……ありえないわね」

と続く委員長の言葉。その他にも「恥ず!」「いるんだ、あんな言葉言える

人」「さすが真司だ」と言われる。この拍手は今の俺の言葉が良く言えたなと称えられる拍手だった。う……最悪だ。

「まあまあ、京もこう言ってくれるわけだし、頑張っていこうぜ」

「来てくれる人に申し訳ないわ」

二人の委員長の言葉でクラスメイトは先ほどよりも気合の入った作業を始めた。

まあ、これで良かったかな？

「あらあら、皆頑張ってきてるわね」

ふいに教室に入ってきた泉 好江先生が言ってきた。先生も本当は帰宅する

予定だったが、クラスの為に最低限出来る事をする為に残ってくれたのだ。優しい先生だ。

「終わったら皆で食べにいきましょうね。先生奮発するから」

オー!!!と学校全体に響き渡る。そして更に作業スピードが上が

っていったのだ。

「先生、いいんですか？」

「こんなに頑張ってるんだし、明日は文化祭でしょ？良くしていきたいの」

先生はウィンクして言う。反則的過ぎるな。そして1時間近く頑張っていていき、完成した。

終わったー！！と全員が叫んで再び学校全体へと響く。この後教頭がうるさい！と怒鳴り込んでいき、泉先生が教頭をなだめた事はお決まりだ。

その後クラス全員が泉先生に連れられて来たのは焼肉屋だった。有名な店で、この街に住む人なら知らない人はいないという。何と泉先生はその開業者の娘であったんだ。各自席に着く。何故か俺の両左

右の席には、右が委員長で左は黒宮の組み合わせだった。微妙に最悪だ。俺達の前に並べられる高級そうな肉。

「さあ、遠慮せずに食べてね」

先生がウィンクしたと同時に戦争が始まったのだ。

「・・・・・・・・」

黙る俺。肉を取っていく生徒。肉を争う委員長二人組みは近くにあった大型機で落ちげーで勝負していた。微笑む先生。そして俺の左右空いた席には。

「やはり羽間氏の言う事は分かってるな。元来コスプレという意義

に対して」

「いやいや、三嶋先輩こそアニメに対する魂をご存知で」

何故かいた。どうやら、親睦の為にこの店で食べに来たらしい。偶然にも俺達を見つけて同席したわけだ。

「真司氏はやはりコスプレにおいては服装だけではなくサブパーツがいろいろだろ？」

輝かしい顔をしながら俺に問う三嶋。ちなみこいつは人気者だから、他の席に座っている女子はこいつを見ていた。会話の内容問わずに

「まあ、そうだな。特にメイド服ならネコ耳・・・って！んな事聞くな！」

三嶋の胸倉を掴んで言う。一瞬女子の目が引いているような感じがした。というか、何で俺は答えたんだ。

「いやー分かってますね真司先輩も」

頷く羽間。同感すんのか！

「同志だからこそ聞いたんだ！！」

胸倉を掴まれながらも俺の顔を見て言う。

「いつ俺が同志になったんだ！！」

「生まれたときからだ！」

「運命共同体かよ！おい！」

俺は掴んだ手を離す。三嶋は何とも思わずに襟を直していた。近くにいた女子からは「大丈夫？」と声を掛けられている。

「はあ」

俺は席から立って。

「少し外の空気吸ってくる」

俺は焼肉店から出て夜空を見た。何だかんだいって楽しいな。こうして皆と何かをやるのって。

そんな事を思いながら、数日前にあつた事を思い出すと。

「ん？・・・最近何もないな」

学校での事件以来、特に何も無かった。学校は割れたガラス等傷一つ無い。

どうやら、空間遮断されている時は壊されても問題ないと福山から聞いた。

それから俺の周りでは何も起きなかつたな・・・。二日連続起きたせいで、毎日受けるのかと思ってしまった。いけないな、うん。そんな事を思いながら焼肉店に戻って戦争に巻き込まれていき、最悪な夜を越えて文化祭当日へと入ってしまった。

3 - 2 (後書き)

行がずれて、読みにくくなっていたので、至急直しました。
申し訳ないです。

昨日の焼肉戦争のせいで帰るのが遅くなった。あんまり食べれなかったおかげか、美里の手料理を余す事無く食べたのだが・・・寝るのが遅くなってしまった。コンビニで栄養ドリンクを買って今、教室で飲んでいる。

「ふう。よし」

飲み終えた後にゴミ箱に捨てる。よくタウリン1000mgとあるが、1gじゃんと思う。まあ、その方が沢山入っていて効き目ありそうと思うんだよな。多分人生において役に立ちそうだなと思うと。

「開会式よ、皆体育館に行きなさい」

浦坂委員長が教室にいる全員に呼びかけられて、体育館へと行く。先生の指示通りに体育館で並んでいき、全クラスが集まって開会式が始まった。

「諸君！ついにこの日がきた！どれだけ待ち望んだ事か！！」

壇上の腕でマイクに向かって大声で暑苦しく喋る男はもちろん板垣将生徒会長だ。横には副会長の如月 彩菜先輩がいる。

一瞬、事件の時の二人を思い返すが、すぐに目の前に集中する。気にしないようにしよう。

「皆で文化祭を成功させようではないか。では、この水無月文化祭において！重要な事は何か知っているか！？それは・・・愛だ！！」

大声で叫ぶ生徒会長は如月先輩にどこかへ連れ去られて、何事も無かったかのように戻ってきた如月先輩がマイクの前に来る。何があった……？

「それでは、皆さんの心に残るような楽しい文化祭になる事を祈ります」

パチパチとさっきの事が無かったかのように皆は大いに拍手する。如月先輩の言うとおりに楽しまないとな。それから校長の話やイベントの紹介が行われた。中でも注目なのが明日行われる学校1番の美女を決めるミスコンだ。水無月文化祭の伝統でもあるそうだ。開催式は終わって文化祭が一般開放される12時まで準備だ。あと30分。喫茶店みたいに内装された教室に戻って、しばらく黒宮や他の男子達と話しながら内装の準備をすると教室にいなかった女子達がぞろぞろと入ってきた。目にしたのは。

「お……おお！」

喜びを溢れんばかりに言う黒宮。そう、彼女達はここメイド喫茶で接客する為のメイド服を着ていたのだ。黒のワンピースにフリルの付いた白いエプロン。そしてカチューシャという基本セットだ。素晴らしい！はっ！何を思ったんだ！？俺。

「いやー！さすがは俺のベストチョイスだけの事はある」

自信満々に言う黒宮。周りの男子も頷く。うん、頷こう。

「はあ」

ため息をしながら現れたのはメイド服を来た委員長。長い黒髪のポ

ニータール。いつも通り眼鏡をかけていて、エプロンからは大きく胸が盛り上がっている・・・ここ・・・ここまで似合うとは。

「イエーイ！似合ってるじゃん！かおつち」

「ん・・・な、何よ！別にあなた達の為に着たんじゃないから！」

顔を少し赤くしながら言う委員長。それも似合っている。これがツンデレか。

ん？何考えてるんだ、俺は。たくつ。

「ツ・ン・デ・レ。ツ・ン・デ・レ。はい！一緒に」

ツ・ン・デ・レと合唱をする俺を除く男子達。さて、悲劇が起こる前に教室から出よう。委員長、黒宮、絶対壊すなよ。

俺がする仕事は生徒会の事があるから免除されている。後は彼らに任せていこう。俺は時々売り上げを貢献すればいいかな。

「あつ、京^{けい}」

教室を出て会ったのは美里^{みり}だ。

「一緒に見て回る」

笑顔で言われる。

「仕事は？」

「保健委員で構内や外の見回りって感じだから、実質遊んでいいの。何か起こるまでね」

「そうなんだ」

そうになると、福山も同じかな。そう思いながら一緒に歩く。美里のクラスで開いているホットドッグのお店で何故かランダムに注文されて激辛のを食べさせられたり、その後に出てきたデザートは杏仁豆腐を美味しく食べて、ミニボウリングとかある出し物で遊んでいき、3年生の自主制作映画を見たりした。ここまで周りの視線が痛かった事は忘れよう。

「楽しかったね」

美里はかなり楽しんだようだ。

「まあ・・・な」

何で会長が主役のヒーロー映画を見なきゃいけないんだ。しかも何で最後は敵の女王役の如月先輩とラブラブになって終わりなんだ。ハッピーエンドだけとおかしすぎる。一息に近くのベンチで美里と一緒に買ったクレープを食べながら話している時に。

「あれ？」

聞き覚えのある声が横から聞こえた。

「あつ、零ちゃん!」

美里が声を上げる。見てみると確かに福山がいたが、隣には・・・見慣れない男がいた。

サラサラしていそうな茶髪に顔立ちが整った白い肌。外国人のよう

だけど、日本人にも見えなくもないな。そして爽やかなイメージがある。そんな彼を見ていると。

「こ……これは……!」

福山が左右の手を横に振りながら俺に向かって慌てて言う。ん？ど
うしたんだ？

「もしかして……お邪魔だった？」

美里がぎこちなく福山に言った。

「う……ううん!!こ……これは」

更に慌てふためく福山だったが。

「勘違いしたのならすいません。彼女には文化祭の案内をしてもらっているだけです。数日前に転入したばかりなので。ですから、これはデートではありませんよ」

福山の隣にいる男が美里と俺に丁寧に説明をした。日本語を自然に扱っていて、声はとてもクリアで聞き入れそうだ。そういえば、数日前に同学年の男の転入生の話は少し聞いていたな。黒宮は「野郎に興味はない」と言ってたのを思い出す。

「あつ、そうなんですか」

美里は納得したようだ。ちなみに俺は何も気にしていなかったけど。

「そ……そうよ。今回文化祭が初めての彼を案内しているのよ。」

勘違いしないでね」

福山は落ち着いていき説明をする。俺は勘違いしていないぞ。突然放送が入る。

『保健委員の皆さん。保健室へ来てください。繰り返します』

「保健委員って事は」

俺は美里と福山を見る。

「私達ね」

美里はクレープを食べ終わって立ち上がる。

「あ・・・そうだね」

福山は隣の彼を見ながら言う。

「いえ、大丈夫ですよ。ここまで案内してくれてありがとうございます
ました」

「そう？ごめんね。行くわよ美里ちゃん」

「うん。また後でね、京」

「ああ」

二人は校舎内へと行く。福山がチラッとこっちを見てきたが、すぐに校舎内へと入った。

さて・・・どうするか。

「お隣よろしいですか？」

。横にいた福山が案内していた男が俺に向かって言う。この男は・・・

文化祭の途中で福山が案内していた男がベンチで俺の隣に座った。

「初めまして、僕は先日イギリスから来ましたフレン・滝川です」

とても丁寧に自己紹介をする。こういう人は周りに上手く溶け込めるんだなと思ってしまっただけ。

イギリスの方が、何となくそう見えるな。それにしても。

「珍しい名前だな」

日本語と外国語の混ざる名前が。俺は初めてそういう名前の人を見た気がする。

「一応純粋なイギリス人です。日本に住んでいる方の養子になったんですよ。その方の苗字を名乗っているんです」

なるほど、それなら納得出来るな。俺も自己紹介をしないと。

「俺は真司 京けい。あんたと同じ学年になるな」

福山が案内していたとすれば、同じクラスメイトでそうしたからだろう。

「そうですか。よろしくおねがいします」

爽やかに彼は言う。本当に中々こういう人は見かけない。とても良い人に思える

「風が気持ち良いです。イギリスとはまた違うように感じます」
流れる風を感じながら空を見る。何だか様に見えてしまう。

「それにしても随分と楽しい祭りですね、ここは」

遊んでいる生徒や外部の人達を見ながら滝川は言う。

「去年もそうだったけど、この学校は行事に力を入れているから、他の所とは違うんだよ」

それで入学する生徒も大半いる。区内ではそれなりの人気のある高校だ。

俺が入学した理由は単に近かっただけだ。

「それはとても良い事です。では聞きたいことがあるんですが、いいですか？」

「ん？いいけど」

「君と一緒にいたあの子はガールフレンドかな？」

「は？」

いきなり何を言うんだ？なんでそんな事を？

滝川の言うガールフレンドの意味を探る。友人か恋人か。
でも、言う事は。

「幼馴染だ。恋人とかという関係じゃない」

美里とは家が近くて昔もよく遊んでいるが、そういった仲じゃない。黒宮がよくからかうけど……。

「そうですか。では、福山さんとは？」

福山か・・・友人とは・・・いえるか？答えるなら。

「知り合いだ。会ったのは今週の月曜日だし」

会ってそれくらいだよな。それにあんまり知らないし。滝川は聞いて少し驚いたようだ。

「では、気になりませんか？彼女の事」

唐突にそんな事を言ってきた。気になる？

「何が？」

「いえ、それなら別にいいんです。ただ福山さんが可哀想だなと思っただので」

「可哀想？」

「ふふ。いずれ分かれるといいですけどね」

意味の分からない事を言う。何が言いたいんだ？

「彼女を幸せに出来たら良いですね」

「福山を？」

「ええ。とても」

滝川は遠くを見つめるように言う。幸せ、か。

「何でそんな事を思うんだ？」

聞いてみる。滝川の言った言葉の意味を知る為に。

「一目ぼれと言ったらどうします？」

「……え？一目ぼれ？」

「……まさか好きなのか？」

「はい」

爽やか度MAXで滝川は応える。滝川は……福山の事が好きなのか……。うん。

「それで、どうなんですか？」

「……いや、いきなりそう言ってもな」

正直言いようがない。

「うん」

考える。出した結果は。

「頑張つていけば何とかかなると思うぞ」

滝川を応援する事だ。

「ク・・・ハハハ。君はひどい人ですね」

笑いを堪えながら言ってくる。

「何だよ、せつかく人が応援してあげたのに」

「そういう意味じゃありませんよ。ますます可哀想に思います」

「何なんだ・・・」

何か分からなくなってきた・・・。

「彼女は純粹なんですよ。転入してくれた僕を親切に案内してくれましたし、それに色んな優しさがあるんです。そんな彼女を幸せにしなければいけない。僕はしてあげたいんです。彼女の望む人にはなれないけれど・・・それでも」

真面目に福山を語る滝川。本当に福山の事が好きなのが伝わってくる。そういう台詞を滝川が言っても全然違和感がない。言いたい事を言っていて、かなりカッコよく聞こえる。でも、俺も言いたい事は言っただ。

「そうか？今なら間に合うかもしれないぞ」

俺はベンチから立ち上がる。滝川は不思議に思いながら俺を見ただろつ。

「もうすぐで委員会の事は終わっていると思うし、会って言ってみればいいんじゃないか？」

幸せにさせたいなら、早くさせなきゃな。俺も少なからず手伝うし、いくぞ」

俺は進む。滝川の望む事を少しでも叶うように手助けする為に。

滝川がベンチから立ち上がる音が聞こえた。

「その前に、まずは君を殺さない」と

その言葉が後ろから聞こえて、すぐに振り返る。瞬間、鋭い風が顔の真横を通った。

頬にはわずかな切り傷が出来て、そこから血が少し下へ流れる。通った風はまるで・・・刃のようで、頬をかすったんだ。

「なっ・・・！」

滝川から聞いた言葉と今の風・・・俺は戸惑う。

「あんだ・・・」

滝川は立っていて、俺を見る。爽やかな顔ではなく、冷酷な目つきで人が変わったように。

「命令により君を殺す」

それが俺に向けられた言葉だった。

フレン・滝川。あなたは一体……。

「あなた……ニュー・チルドレンか」

「ええ、その通りです」

やはりそうか。さっきの攻撃は能力スキルだろう。

「何のつもりだ？」

頬から流れる血を手で拭いながら聞く。攻撃をした滝川はさっきの表情とはまったく違う、冷酷な目つきで俺を見たままだ。

「殺すんですよ。日本に来た時に最初に聞いた命令がそれですから」

命令……組織に属していることか。

「ラストか？」

数日前にラストにいる宮下から攻撃を受けている。

「違いますよ、ラストとは関係ありません。イギリスにある影の組織と言えはいいんですかね」

アークと違う……影の組織？要するにラストとは違う組織にいて事か。国内だけだと思ってたけど、外国にもあるのか。けど、ラストとは関係ないなら。

「何で俺を殺すんだ？」

まったく意味不明だ。殺されるのはあの時だけだと思っていたのに。

「君の事は数日前に知ったよ。ほとんどの組織が君の存在を確認したよ。ただ、僕の組織では調査でファイルを取るのに、君が邪魔だと聞きました。よって、まずは君を殺す事にしたんです」

ファイル・・・？何の事だ？

「待て。ファイルって何だ？俺はそんなのは知らない」

「嫌々知る事になります。そして邪魔をさせない為に」

周囲の風が滝川の元へ集う。まだ周りに人がいるのに。

「ここなら大丈夫です。他の人は離れていて模擬店に集中しています。それに、近くにいない限り操作した風を見る事はありません。風を気にする人もいませんしね。僕スキルの能力だからこそ出来る事ですから」

風・・・つまり、滝川の能力スキルは風を操るみたいだ。厄介だ。ここは福山・・・後は羽間に。

「言つときますが、君以外を殺す気はない。騒ぐのなら・・・この水無月文化祭を壊します」

水無月文化祭を壊す・・・。皆が頑張つて成功させようとしている

事を。

「……………」

俺は黙る。それは誰の助けもいらないう事。

「それでいいです。皆が楽しむ文化祭を壊したくないですからね。それに僕も壊したくなかったから」

一瞬、滝川の目に優しさが戻る。

「俺はあなたの事を良い奴だと思っていた。福山の事も真剣に語っていた。こんな事をするとはな」

「良い人かはともかく、彼女の事は好きですよ。任務には彼女が含まれていませんので、ちゃんと遂行します。君が死んでも上手く処理されますし」

俺だから出来る任務か。殺す気でいるんだな。なら。

「そうか。俺を殺すなら……………やってみろ」

俺は滝川を見据える。分かった。殺すなら、殺してみろ。

「威勢が良いですね。どうやら能力スキルが無いみたいで」

確かに俺は能力を使えない。持つてるかどうかは不明だけど。

「それでは何も出来ませんよ」

「出来るぞ」

「ん？」

滝川は疑問に思うだろう。そう、俺には出来る事がある。それは。

「いくぜ！」

走る。俺が出来る事は全力で逃げ切る事だ！振り返れば、滝川は呆然としていた。

騒がなければいい。ただ逃げる。学校では無理だと思っから、校外に出ればいい。

ほとんどの人が水無月文化祭に来ているから、校外にはあまり人がいないはずだ。

「なっ！」

鋭い風が俺の右肩にかする。学生服の肩が破れてしまっている。

「くっ！」

俺は急いで路地裏に入る。この先は数日前に行ったゲーセンで、その近くは宮下や福山と会った場所だ。

(どつする・・・!?)

学校で宮下に襲われた時と同じだ。ただ逃げる、それをするだけ。滝川に対しては何も出来ない。

「逃げてても無駄ですよ」

ぶわつと上空からの風が俺に目掛けて吹き荒れる。走るのを止めてしまった。

風がやむと同時に俺は見上げる。宙から静かに舞い降りるように滝川の俺の前に着地する。

風の力でそんな事も出来るのかよ。卑怯すぎる。

「それでは」

滝川は右手を前に突き出した。その手の平から強風が発生して俺を襲った。対抗策は……ない!?

「がはあ!？」

俺は強風に吹き飛ばされて後ろの電柱に背中から激突する。全身が痛む。

階段で転んだ時の傷も治りかけたのに、それよりも上回る痛み。俺はそのまま崩れるように地面に尻を付いた。

「今のでは死ななかつたですか、それなりに丈夫みたいですね。さすが僕達だと褒めたいけど、殺します」
「ニュー・チルドレン」

周囲の風が滝川の右手に集う、それは刃のような手刀になっていく。滝川はそれを放とうとする構えをした。切りつけるつもりか……。俺の周りには工事する人達が使っているだろう物が散らばっていた。

「くっ……!」

今までは福山や会長達に助けられたけど、今回は無いようだ。

ここで死ぬ、か……。死ぬ。俺の人生はここで……。終

わる。終わる？

いや、まだだ。終わるわけにはいかない。絶対に死にはしない。分らない事はまだあるんだ。生きる。生きるんだ！

「終わらせ・・・ない！」

俺は立ち上がる。滝川から放たれた風の刃が迫ってくるが、俺は対抗してみせる。

そして生きて水無月文化祭を楽しむんだ。

「はぁ!!！」

俺は下に落ちてあつたビール瓶のガラスを投げ込む。風の刃目掛けて、完全に！

「なっ!?!？」

滝川は驚く。自分の放つた風の刃がビール瓶に当たって、俺の元まで攻撃が届けなかったからだ。

ビール瓶は割れて破片が散らばった。その間に俺は滝川に向かって走る。

「させません！」

再び右手から風の刃を発生させて俺に向かって放つ。そのまま受ける事を考えるな。どう対処するか、何をすべきか判断して行動しろ！滝川の風を知るんだ！

「はぁ!!！」

俺は走る前に拾った工事で使うヘルメットを投げる。分かった事の一つは滝川の放つ風の刃は集めた風を限りなく鋭く小さくして作られた者だ。それなら、それよりも面積が大きくて丈夫な物を風に当てればいい。迫りくる風に。ヘルメットは風の刃にぶつかって飛ばされたが、風の刃を防いで俺に届かなかった。そして一気に滝川までの距離を縮める。後数メートル。

「バカな！？対処法が分かっても、風自体に当てられるはずが！風の軌道を読み取って・・・いや・・・まさか、風を分かっているのか！？」

滝川は驚愕して言う。その通りかもしれない。当てずっぽうでも何でもなく、ただ分かるんだ。滝川の発生した風を頭の中で瞬時に理解して行動している。今までもこんな事に似た事があったが、今回は違う。滝川の言う通り分かるんだ。この状況を打破する答えを。

「ちいっ！」

近づく俺に対して、滝川は自分の前に風を集わせた。それは強風を起こす事が出来る程に集まっている。けど、それでも！

「うおおおー！！」

俺はその集う風を中心の地に強く右足を踏み入れる。風は分散されていった。風を集う場所を叩けば、風は集わなくなる。それを狙った。

「！！？」

啞然とする滝川。距離は既に目の前。後は顔を殴るだけだ！

「これで！」

殴りかける！

「………？」

俺は滝川の顔を殴って……いない。滝川の顔面の前にある拳がまるで風に押されてるようだ。拳が進めなかった。滝川は平然になっている。

「お見事でした。ここまででは本当に」

「がっ！」

そして俺は吹き飛ばされて地面に転がる。

「僕の体には風が包み込んでいます。大抵の攻撃なら自動的に風によって妨げる事が出来ません。風で出来た鎧だと思ってください」

ゆっくりと滝川は近寄る。体が……上手く動けない。

「正直驚きましたよ………ここまでやるとは」

滝川は右腕を上あげた。その上へと風が流れた。

「ゼピュロス」

上空から舞い降りるようにくる槍をフレンは右手で持つ。その槍は長く、刃は長くてギザギザと曲がっ所々ている。

「ギリシヤ神話にいる西風の神が持ったとされる神話の槍です。レプリカですけど、本物に近くてマジックウエポン（能力作用武器）になれます」

マジックウエポン。確か能力に相性のある武器が能力により作用されていると福山から聞いていた。

羽間も持っていると聞いたが……。あんなの持っているなんて。今までのも本気ではなかった。穏便に殺す事を無視すれば、最初か俺を殺せたんだ。

滝川はその槍を俺に向けた。

「いくら対抗出来る考えを持っていても、まともに動けない体。そして圧倒的な力には何も出来ません」

その通り……。しかも、それだけじゃない。さっきのように頭が回らなくなっている。何も出来やしない。確実に殺される！

「これで……。いいのか？」

滝川は静かに呟く。

「君を殺したら……。を悲しませてしまう。が泣いてしまつて苦しんでしまう……。そんな事を僕はさせたくない。そしたら意味が無くなってしまう」

小さく小さく呟いている。そのせいか聞き取れない箇所があった。その表情は曇っていた。俺は何にも言えない。その言葉には滝川の

行動する大きな意味があつただろう。

「……………それなら僕は」

滝川は真つ直ぐ俺を見据えてくる。

「僕は僕なりに彼女を幸せにしてみせます。これが今の僕の意志です」

向けた槍の先を下に向けた。攻撃は……してこない。俺は何とか立ち上がる。

「……………殺さないのか？」

「ええ。命令違反になります」

俺を殺す命令を……違反。いきなりどうして？

「何でだ？」

「それが正しいからと思ったからです」

滝川は踵を返した。その背中はとても勇ましく見える。けれど、同時に寂しくも思えた。

「水無月文化祭を楽しんでください。彼女にも楽しませてください
ね」

「……………あんたはどうするんだ？」

「僕なりにやるべき事をします。たとえ組織から狙われていても、自分が信じたまま動いていきます」

その声からは十分な決意を感じた。

「それでは頼みますね。これからもお願いします」

滝川はそのまま去っていく。

「・・・・・・・・」

どうしようもなく今の状況を上手く理解出来なかった。

組織の間で俺の事が知られて、滝川が言ったファイルの事で俺を殺そうとした事。俺が滝川に対して出来た行動。滝川が俺を殺さなかった理由。滝川が福山の為に取った行動を。

「はぁ・・・・・・・・」

今はいいか。とりあず時計を見る。時間は午後2時。今日の文化祭が終わるのは午後5時までだ。まだいける。滝川の頼みを無視するわけにはいかないからな。

広いモニター室。ドアが開かれた。

「ただいまー」

「どこへ行っていたんですか・・・」

白衣を着た女性は呆れながらマスターに聞く。

「散歩だよ。気分転換にね」

マスターは椅子へ座ってモニターを見る。

「外国の勢力が既に来ていたんですか？」

「来ているさ。まずはフレン・滝川だったね」

「国内では一般的、まあチルドレン関係者には知られていないが、外国では能力を応用的に使っていてね、結構手応えがあるんだ。日本より積極的に元来ある魔術、魔法の定義を組み込んでいるのさ。特に西洋魔術をね」

「厄介なのは、魔法といえれば大体思いつくアレだね」

魔法を知っているなら必ず知っている事。

「・・・それもそうですが、まずは真司 京の事です」

「何だね？」

「先程の行動を見ましたが、彼に関しては不明な事があります。どういうことですか？」

「それを解明するのが君達研究者だ」

マスターは右手の人差し指を立ち。

「答えを導き出す意味を考えてみたまえ」

ヒントを彼女に与える。それはとても重要な意味である事を。

「……分かりました」

「まあ、彼の危険性をいくつかの組織に知らせといたし面白くなつていくだろうね」

マスターは微笑む。この先の展開を分かっているながらも。

戦いの後フレン・滝川は歩く。

真司 京のあの行動。風の軌を知っていて狙い。集束する風の位置も分かっていた。

ニュー・チルドレンといえど咄嗟に出来る事じゃない。組織からは彼が今後の邪魔になると聞いていたが、詳しく知らされていなかった。経歴についても数日前まではニュー・チルドレンとは一切関わっていない。戦闘についても彼は参加していなく、能力は持っている

るか分からない。組織は実態が掴めていないだろう。先程の行動も含めて、まだ彼について不明な所がある。もしかすると予想以上に厄介になるかもしれない。あるいは……。そう考えていきながら歩く。

「……きましたか」

風が教えてくれる。自分に迫る人を。

「何故見逃した？」

聞こえた声。前から4人現れた。3人は重武装をした20代の男性達。一人は滝川と同じ年と思われる男性が現れた。滝川に命令を下した組織の一員で、日本に潜伏している者達だ。今の声を発したのは彼だろう。ニュー・チルドレンであり、日本人ではさばさな黒い髪を揺らしている。

「まさか裏切るのか？」

先程同じ声。

「ええ。その通りです」

迷いなく答える。それが滝川の意味。真司 京に伝えた事。

「ふざけた奴だ」

「あなた達はそうでしょう。でも僕は真剣です」

もう戻れない。真司 京に……。いや、福山 零と会う前の自分に。

「前から気に食わなかったぜ。んじゃ、裏切り者は死ねしかねえか」
男も能力を持つ。なら、それを使ってくるはず。武装する人達も銃を構えた。

「そしてお前を殺したら、次は真司 京を殺す」

述べられる予定。男が組織から下された命令を。

「ついでにXもやるか。やるとしたら福山 零を殺せばいい。関係者を殺しといた方が良くないか」

男は予定を追加して言う。それは言っではいけない言葉だった。

「なっ……!?!?」

男は能力を使う前に異変を感じた。武装する構成員達も戸惑う。周囲の風が滝川の前へと集う。

はつきりと見える集う風。そして円の形が形成される。それは魔法陣。風によって出来た魔法陣だ。

「お……お前!?!?」

男は驚愕する、その圧倒的な力に。異端な光景に。

「それでは」

滝川は静かに鋭く言う。男達に伝える最後の言葉を。

「苦痛の眠りを」

魔法陣から暴風が発生して固まったままの男達を襲う。

その力は台風クラスすらも上回り、男達は暴風にのまれた。

やがて魔法陣は元の風へと流れていき、暴風も戻る。目の前は誰もいなかった。

「では、いきますか」

フレン・滝川は進む。かつての組織の仲間の生死を一切心配する事なく。

「同じ者だろうが関係ない。僕は・・・」

フレンとの戦いを終えた俺は全身を痛めたまま学校へと戻る。

戻る前に自宅に寄ってボロボロの制服を着替えた。これで福山達には知られないかな？

そう思いながら先程のベンチへと戻ると、委員会の用事を終えたであろう福山 零れいが一人がいた。

「あっ！」

俺を見た福山は駆け寄ってくる。けど、なんだかお怒りのようなのは気のせいだろうか？

「……滝川君は？」

……ここで言うべきだろうか。フレン・滝川の事を。けど、あの時去っていく滝川の事を思い出す。

「用事があるみたいで、帰ったみたいだ」

「そうなの？」

言う必要はない。本当に純粹に俺は思う。

「分かった。あなたはその後どうするの？……美里ちゃんと一緒？」

「いや」

滝川の言葉を思い出す。「彼女も楽しませて下さい」と。

「福山は案内でそんなに遊んでなかっただろ？なら、一緒に見て行く」

「……え？」

福山は予想外のように驚いている。

「もしかしてダメだったか？」

「え……う、ううん。い……いいわよ」

少しぎこちなくなっていく。迷惑だったか？

「い……一緒に回ろう。うん。見て回ろう」

福山は綺麗に180度回転して進む。どうしたんだ？

「何してんのよ？早く回るわよ」

「ん？ああ」

どうやら先程のお怒りは消えていたようだ。構内へ入っていく。美里と一緒に回って見たけれど、福山と巡るとまた違って見える。

福山のクラスの縁日では福山は楽しそうに遊んでいる。そんな姿を見ると俺は安心したような気がした。他のクラスを見てみると、自作プリクラという催し物をしている。周りはカップルであろう男女がいた。

「二人とも撮りますか？」

「「え？」」

そのクラスの男の人が俺達に言っつて俺と福山は同時に声を上げる。

「今ならカップルは写真1枚無料です」

「カ・・・カップ・・・ル」

ぎくしゃくしながら福山が呟く。いやいやカップルって・・・おい。俺は何も言えなかった。

「どうですか？記念になるので」

男は勧めてくる。

「・・・記念なら・・・撮りましょ」

福山は言っつ。

「はい？」

いや、撮るっつて言っつても・・・。

「おい、福山。俺達は・・・カップルじゃあ」

そう言っつと福山の顔が少しずつ赤くなっつていく。

「はいはい。では撮りますよ」

いきなり現れた男女に引つ張られて写真を撮る場所に連れて行かれる。

只今福山と隣り合わせです・・・はい。

「・・・福山」

「こうなったら撮るしかないわよ。仕方ないからね」

そう言いながらも何故か楽しそうに見えるのは気のせいか？

「では、いきますよ」

男はカメラを構える。はぁーしょうがないか。

「せーの」

覚悟を決めてカメラを見据えようとした瞬間、パリーンと音が鳴る。一本のナイフが飛んできて、カメラのレンズに刺さり、破片が飛び散った。

撮影者は驚き、俺も福山も驚く。この部屋にいる全員が驚いただろう。

「な・・・何が？」

撮影者や他の人たちがざわめく。そこへ。

「そつはいきませんわ」

俺の前に女生徒が現れる。金髪の長い髪に整った外国風な美貌の少

女。彼女が着ているブレザーはまるでドレスのように見えた。

「お騒がせしてすみません」

そう言いながら

彼女の後ろにいるのは高身長で長い黒髪をまとめて、整えた顔立ちで自分達と近い歳の男が漆黒のスーツを着込んでいる。飛んできたナイフを拾って磨いている。投げたのはこの人だろう。

その二人を合わせて見ると、こう思うはずだ。「お嬢様と執事」と。

「レ・・・レイチエル！」

福山は彼女に向かってそう言う。レイチエル・・・確か黒宮からそういう外国人の女子がいると聞いた気がした。

「福山 零。あなたは邪魔よ。そこにいるべきではないわ」

「何ですって？」

「今すぐ立ち去ってくれないかしら？」

お互い目を合わせて話す。そこには誰もが割り込めないような領域を感じる。

「（・・・彼女はレイチエル・ランベルシエ。彼女もニュー・チルドレンでXに入ってるの）」

小声で俺に彼女の説明をする福山。彼女もか！？

「（じゃあ仲間なのか？）」

俺も小声で言う。

「（仲間だけど・・・ね）」

福山はぎこちなくそう言う。

「大丈夫でしたか？」

俺の隣には漆黒のスーツを着ている執事らしき男が俺に言った。

「私はお嬢様の執事、クロイア・ヘイゼル・ユーデイクスです。真司 京様」

やはり執事だったのか・・・本物を見るのは初めてだ。というか・・・。

「え？何で俺の名前を？」

「それはもちろん」

執事クロイアはにっこりと微笑む。

「ほっほほほ！」

レイチエルは高貴に笑いながら俺の前に来る。既に目前。

「京様」

「え？」

いきなり名前で呼ばれて驚く。しかも様付けで!?

「私わたくしのお付き合いをお願いします」

「……………は？」

その言葉に俺や福山ではなくクラスにいる全員が固まった。

「ちょ……ちょっと待ちなさいよ!？」

福山はレイチェルの肩を思いっきり掴んだ。

「あら、何ですか？」

「何ですのじゃないわよ!一体どういう事!？」

「あら、私わたくしは京様に明日の文化祭のお付き合いをお願いしているだけですよ」

あ、そうなのか。じゃあ今のは告白ってわけじゃないのか。

何だビックリした!。周りからの視線が痛いのは気のせいかな?

「強引すぎよ!」

「あなたには関係ないことですか？」

「そ……それは」

「ほっほほ!なら、いいですわね」

レイチャルは改めて俺を見ると。

「それと京様。私がミスコンで優勝したら後夜祭もお願いしますね」
わたくし

ミスコン。それは校内で一番の美女を決めるコンテスト。

彼女の美貌なら優勝になれる可能性はあるだろう。けど、何故俺にお願いしているんだ？

執事は微笑みながらレイチエルを見ていた。

「いいですわね！」

俺の両手を握りながら言う。

「ん……ああ」

よく分からないまま曖昧に応えるが。

「……………」

福山を見ると、そこからは静かな怒りが舞い上がるように見える。

「……………あたしも出る」

「何ですって？」

レイチエルは眉をピクツと動かす。

「あたしもミスコンで出るわよ！覚悟しなさい！」

そうレイチエルに宣言した。

「い・い・いいですね。覚悟するのはあなたの方ですよ」

見えざる闘志がぶつかり合っている。

「……今日は最悪だな。ただ俺はさっきまでの出来事を振り返りながら思った。」

3 - 7 (後書き)

すいませんが遅くなりました。次の更新は早めにしていきます。

校庭で一人歩く男子生徒がいた。ウェイターの服装の上から腰の辺りまで中途半端に着るコート。

羽間 楓。ニュー・チルドレンでありXに所属している。彼は今何かのコスプレをしながら歩いていた。もちろん彼の意思で。周りから痛い目で見られているが、本人は気づいていなかった。

(どこを見よう?)

そんな事を考えながら歩いていると。校門から走ってくる生徒がいる。その人物は。

「真司先輩！」

「ん？」

真司 京。羽間は知らないが先程、命を狙ってきたニュー・チルドレンと戦っていた。

「は・・・羽間？」

真司は数秒の間の後に羽間である事を気づく。羽間の服装は周りから見ても異端だったからだ。

「その格好は？」

「コスプレですよ。ついに着る時がきました！」

「そ、そうなのか・・・」

「先輩はどうしたんですか？校外から来ていて」

「いや、忘れ物を取りに行っただけだ」

文化祭では朝の出席さえ取れば、校外に出かけたり帰宅出来る。ほとんどは買出しをしている生徒が多い。

「・・・」

真司は羽間の体を少し見た後。

「怪我・・・大丈夫か？」

「な・・・何の事で？」

羽間は数日前に野山 光の電撃を受けており、肩の傷があったのだ。少しずつ治りかけているが、まだ痛んでいる。

「そうか。ならいい。じゃあ、俺は戻るよ」

そう言っつて真司が進もうとした瞬間。

「おお！同志羽間氏よ」

生徒会会計 三嶋 博幸。

クール気取りのような（おそらく天然だろう）奴がやってくる。イケメンであり、その容姿の良さから女子に人気がある。あの性格には羽間の通じる所がある。

「おお！そのコスプレはあの人気作品だな。分かっている」

「あたりまですよ！！」

二人の話が始まる。通じるものがあってこそその会話が展開されたのだ。

「・・・じゃあ」

真司は二人が会話している途中に静かにそう言って離れた。そんな時間が数十分過ぎて、羽間は廊下で一人で歩く。今度はコスプレではなく制服でいた。

「うお！？」

羽間は誰かとぶつかった。

「失礼」

流暢な日本語で言われる。長い金髪を後ろで縛ってまとめている。高身長の美形。年齢は20歳前半のようである。外国の人だろう。

「大丈夫ですよ」

肩の傷が痛んだが、それを表に出さないようにした。

「この生徒のようだね」

男は笑顔で羽間に接する。その笑顔はまるで、しおれた花を元気付けさせるような太陽のように感じられる。

「日本に観光していてね。この近くを通ったらここが賑やかで来て見たけど、とても楽しいね」

「この辺りでは有名な行事ですよ」

「そうなのか。それは良い事を聞いたよ。ありがとう」

笑顔で感謝をする。羽間は少し照れるような気がした。

「では、これで」

そう言って男は去った。羽間は2年の教室を見に行こうとした時に。

「ねえ時間空いてる？」

階段付近で不良らしき三人が一人の女子生徒を囲んでいた。

おそらく他地方から来た生徒だ。この文化祭はそれなりに知れているから来たのだろう。

「やめてください」

囲まれている女子生徒が不良たちはっきりと言う。

（助けよう）

羽間はそう思って彼らに近づく。不良達に囲まれている女子生徒を見た瞬間。

(・・・は!?)

羽間は見た。メイド姿の長い黒髪のポニーテールで眼鏡をかけておりエプロンからは大きく胸が盛り上がっていた。彼女は浦坂 香織。真司のクラスメイトだ。そんな事を知らない羽間だが。この瞬間に羽間 楓はときめいたのだ。

「あ?何だ?」

不良の三人は羽間へ近寄る。

「邪魔するんじゃないよ」

もう一人の不良が羽間に向かって言う。羽間はすぐに浦坂に背を向けて立つ。

「あ・・・あなたは」

浦坂は言う。目の前に立つ羽間に向かって。

「下がってください」

そう言い終えた後に制服に隠した木刀を出して構えた。

「!?!?」

不良達は驚いた。

「あ!?!やるのかテメェ!」

不良の一人がそう言い放ち、他の二人と一緒に羽間に襲い掛かったのだ。

「はあ！！」

もはや羽間の敵ではない不良達に横から木刀を振って斬り飛ばしたのだ。

不良達は階段で転げ落ちる。能力スキルを使わなくとも羽間の剣の腕は良い。この学校の剣道部部长を倒している。

不良達はそのまま逃げていった。

羽間は振り返り改めて彼女を見る。その姿に羽間の心臓の鼓動はどんどん早くなっていく。

「だ……大丈夫です……か？」

ぎこちなく言う。

「うん、助かったわ。ありがとう」

その笑顔に羽間は緊張する。ここで言うことは。

「あ……あの」

文化祭で一緒に見に行かないかと誘いたいが、言えるだろうか？

「？」

彼女は不思議に羽間を見る。羽間は目を瞑って考える。

(さ……誘うんだ！)

勇気を振り絞って言おうとした瞬間。

「…………あれ？」

目の前に彼女はいなかった。

「な……なによ！」

「いいからいいから」

助けてくれた男に感謝した後にいきなり黒宮 元気に腕を掴まれて
教室に連行されていたのだ。

「いやーまさかあいつに助けてもらうとはね」

「知ってるの？」

「まあね」

浦坂もさつき助けてくれた男を少し知っている。今年入学した羽間
楓という人で剣道部の部長になっていると。

先程の木刀での腕を見る限り、それなりの上達者に見えていた。

「…………もしかして私が絡まれている所を見てたの？」

これまでもない怒りで黒宮に迫る。

「さっきミスコンのスカウトがきて、かおっちが参加するってしていたから」

「取り消しよ！そうしなさい！」

「残念。5分前に締め切りはしゅくりよう。はい参加！棄権出来る？」

「う……」

ちなみに棄権したクラスは会長特権で売り上げ競争から除外される。

「それじゃあ、明日は歴史に残り大イベントの開始だ！」

オー！クラス中が雄叫びを上げた。

訳の分からない出来事が続いて、もう何もないだろうと思っていたが違っていた。

現在いるのは大きなビルの中の上昇するエレベーター。文化祭が終わった後に福山に連れてこられたのだ。何でもXの本部らしく、福山は俺を連れてこいという命令を受けたらしい。それは分かったが・・。

「福山、怒ってるのか？」

現れたレイチエルと明日のミスコンで勝負するらしいが、さっきから福山は俺の話をあまり聞いていない。

「・・・何よ」

はい？何かしたのか俺？

「どうしたんだ？」

「はぁ・・・いいわ」

「？」

福山は呆れたように溜息をした。何なんだ？エレベーターは着いて俺達は降りる。少し歩いていくとドアがあった。

「111116」

福山は扉から俺に視線を移して

「Xの幹部、日下部 純一。影響力は大きく、私達を束ねているの」
「偉い人っていう事か」

「そういう事になるわね・・・あなたを連れてくる理由は聞いたけど」

「俺を連れてきた理由って？」

俺はXには関わっていない。ただあるとすれば、ニュー・チルドレンだということだが。

「理由は知っているけど、詳しい事は知らないの。
本人から言うはずよ・・・私はここで下がれて命令があるから、ここまで。気をつけなさい」

「・・・」

俺はドアノブを握る。この先に入る事は正しいのだろうか・・・。
俺はドアノブを回して扉を開けて、中へ入った。

「失礼します」

広い部屋で回りは本棚が数多くある。奥のデスクでは誰かが座っているようだ。

「真司 京だな」

髪はオールバックで外見は40代を超えていそうで、顔にいくつかのしわがあった。

黒いスーツを着ている。その人から感じるのは威圧感。

「・・・はい」

俺は日下部という男の質問に答える。

「俺の事を知られているようですね」

フレン・滝川はいくつかの組織に俺の情報が入ったと聞いた。ならXにも俺の事が知らされているんだろう。

「詳しくは不明だがな。その事情を知っているのは何故だ？」

俺は少し黙る。フレン・滝川の事は言いたくなかったからだ。

「心配する必要はない。そして福山達には知らせていない」

「まさか・・・昼の事を？」

「無論知っている」

俺が戦っていたのを知っている・・・内容も知られているとは。

「俺をここへ連れてきた理由は？」

まさか・・・滝川と同じように俺を消す事か？

「その考えは違うぞ」

「ッ！」

考えを読まれた！？。けど、違うという事は・・・。

「君にはこれを渡す」

日下部は引き出しから何かを出した。

「対戦闘用可変式武器 サーベラス」

長方形で携帯のような大きさの黒い色の物が机に置かれる。
ボタンが何個が付いている。

「剣、銃、盾とあらゆる武器に変更して様々に対応が可能とされた
特殊武器だ。完成したばかりだが」

俺はそれを見ていき。

「どうして・・・俺に？」

そんな武器を俺に渡す？何故なんだ？

「君に価値があるという事だ。無価値になる可能性もあるが今はま
だある」

価値・・・俺にあるというのか？一体何の？
ただ思いつくのは。

「ファイルですか？」

滝川から聞いたその言葉。その時日下部が俺を見据えた。

「次の鍵だ」

「俺に関わっていると?」

そして滝川は俺を殺そうとした。

「一応関係はある。それだけではないがな」

日下部は目をゆっくり閉じる。

「では下がっていい」

日下部がそう言い終わると横にあったパソコンを操作する。どうやら話は聞いてくれないだろう。

「……失礼します」

俺は部屋から出る。ドアの前で日下部から渡された物を握りしめる。サーベラス……これは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3711i/>

革命のスキル

2011年1月2日02時33分発行